論　文

前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族とキリスト教

森　安　孝　夫※

※　大阪大学名誉教授

はじめに
第１節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その１）
第２節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その２）
第３節　カルルク族の動向とキリスト教信仰
第４節　セミレチエのキリスト教遺跡・遺物とマニ教の痕跡
第５節　西ウイグル王国のキリスト教
第６節　西ウイグル王国のキリスト教手紙文書
第７節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その３）
第８節　オングート
第９節　ケレイト
第10節　阻卜・ケレイト族のキリスト教改宗と西ウイグル王国

はじめに

景教、すなわち従来はネストリウス派キリスト教と言われてきた前近代アジアのキリスト教の歴史学・考古学的研究は、日本ではかつての佐伯好郎や江上波夫以来、下火になってしまった。私はおよそ半世紀前の大学院生時代に護雅夫教授の指示により「景教」と題する概説論文[1)]を執筆して以来、中央アジア・キリスト教史に関心を抱き続けていたが、シリア語の知識が必須なので深く研究することは諦めてきた。ところが近年、欧米では景教研究がやや異常なほどの高まりを見せており、シリア語文献の英独仏語等への翻訳も信頼性が高まってきた。

一方、日本では帝京大学文化財研究所の山内和也教授を中心とするグループがキルギス共和国のチュー河畔にあるアクベシム都市遺跡（旧スイアブ）の発掘と総合的研究を推進しており、そこにあるキリスト教会址のさらなる発掘に意欲を燃やしている。

本稿は以上のような学界動向に刺激を受けたものであり、特に前近代中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族に関わる三つのキリスト教改宗伝説を取り上げ、それに対応する史実に迫りたい。とりわけ三つのうちの二つは、それぞれカルルクとケレイト（＝阻卜＝九族韃靼）に関わるものである。

さらに、2019年末に出版された英文の拙著『古ウイグル手紙文書集成』*Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road,* (Berliner Turfantexte, 46) に含まれる一通の手紙、すなわちキリスト教聖職者から西ウイグル王族に宛てて出された手紙の実物を取り上げる。９世紀中葉から13世紀初頭にまで及ぶ西ウイグル王国では、その国教が最初は東ウイグル帝国時代からの伝統を引き継ぐマニ教であり、10世紀後半～11世紀前半を過渡期として仏教に交替していくが、実は10世紀以降は少数派ながらキリスト教徒も存在したのである。歴史的・地理的状況に鑑みれば、ケレイト・オングート・ナイマンという13～14世紀のモンゴル時代に景教徒として有名になった諸部族集団にキリスト教が伝わったのは、10～11世紀の西ウイグル王国からであると思われるので、その蓋然性も検証したい。

第１節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その１）

佐伯好郎 1943『支那基督教の研究１（唐宋時代）』や L. Tang（唐莉）2009 “Turkic Christians in Central Asia and China (5th–14th Centuries)” などによると、西暦334年には現在のトルクメニスタンに位置するメルヴ Merv にキリスト教の司教区があり、ササン朝ペルシアのカワード一世（在位488-531年）と関係を持ったエフタルやトルコ族の間にはキリスト教徒がいたし、552年の第一突厥帝国成立直後にソグディアナのブハラにいたトルコ人の間にもキリスト教が広がっていたという[2)]。しかしその根拠となるアラビア語やシリア語やギリシア語の文献を私は自分でチェックする能力はないし、翻訳で見る限りその内容はいかにも胡散臭くてとても信じられない。

中央アジアのトルコ族がキリスト教と関わったことについて、まったくの伝説ではなく史実を含むら

しい最初のものとして信用に値する記事は、ディケンズ M. Dickensの2010年論文 “Patriarch Timothy I and the Metropolitan of the Turks” が取り上げている通り、680年頃の編纂といわれる *Khuzistan Chronicle* というシリア語文献に見える記事である。それによれば644年頃にエリア Elia という名のメルヴの大司教が、多数のトルコ人（Ṭurkāyē）その他を門徒にしたという。この記事は佐伯本や Tang 2009 論文が取り上げるだけでなく、他にも論及されているので[3]、それらも参照しながらそのいきさつを要約すれば、次のようになる。

エリア大司教がメルヴの向こうの辺境の地へ行った時、あるトルコ人部族長が他の部族長との戦争に出かけようとしているところに出会った。それを知ったエリアは、その部族長に戦争などせずに、キリスト教の神を信じるように説いたところ、彼はエリアにその神の奇跡を見せ、トルコ族の神官と競ってみせることを要求した。そして彼がトルコ族の神官を呼び出し、その神官がすぐさま天気の魔法をかけると、一天にわかにかき曇り、雷鳴がとどろき、稲光が走った。しかるにエリアは聖なる神の力を振るって空中に天なる十字架の印を出現させ、悪魔が作り出した幻覚を制禦した。すると一瞬にしてすべてが消え失せた。部族長とその一団は、エリアの行なったこの奇跡を見て、彼の面前に跪いて拝礼した。そこでエリアは彼らを川岸に連れて行き、彼らに洗礼を施し、司祭と助祭を任命して、自分の地（すなわちメルヴ）へ帰った。

以上の通りであるが、ここで天気の魔法と言われているのは中央ユーラシアの遊牧民、とくにトルコ族の間では古くからよく知られたジャダ石による呪術に相違ないから[4]、確かにメルヴの大司教エリアがトルコ族と接触したことは事実とみてよかろう。では、彼が644年頃にメルヴの向こうの辺境の地で遭遇したトルコ族とは何者であろうか。当時のキリスト教東方シリア教会[5]の本拠はバビロニアのセレウキア＝クテシフォンにあったのだから、メルヴの向こうの辺境といえば、それはメルブの東か北である。

メルヴはマルギアナの主邑であり、マルギアナの東はトハリスタン（旧バクトリア）と接し、北はアム河を挟んでトランスオクシアナ（その主要部がソグディアナ）と接している。第一突厥帝国は583年に東西分裂したが、西突厥は確かにソグド諸国を間接統治したのであり、『隋書』巻83・西域伝・康国之条によればサマルカンドの王シシュピル（代失畢ではなく世失畢[6]）の妻は西突厥の達度（タルドゥ）可汗（在位576-603年）の娘であり、王は突厥に服属する証しとして突厥風の辮髪（原文は索髪）をしていたという。達度可汗の孫の統葉護可汗（在位617?-628年）の時になると西突厥はさらに強盛となり、620年代にはソグディアナからトハリスタンにまで支配を及ぼした[7]。しかし彼の死後は西突厥は大混乱に陥り、めまぐるしく覇権が交代した。この時期のソグディアナはまだ各都市国家が健在であり、西突厥による間接支配が緩んだ後であればなおさら、その地にトルコ人が入り込んでいたとしてもそれは部氏族集団ではなく、多くはチャカルという傭兵などとして個人的に傭われていた突厥人であろうと思われる[8]。

これに対して、トハリスタンにはトルコ族が部氏族集団として存在した可能性がある[9]。629年頃、統葉護可汗の息子である咀度設（タルドゥ＝シャド）がトハリスタンを支配していたが、彼の長男が父を暗殺し、テギン（王子）として設（シャド）の位を奪ったことが、玄奘の『大慈恩寺三蔵法師伝』よりうかがえる。内藤みどり説によれば、その人物が欲谷設（シャド）である[10]。統葉護可汗の死後、西突厥は分裂状態に陥ったとはいえ、638年、西突厥西部の集団に推薦された欲谷設が乙毗吐陸可汗となって、西部天山北麓のセミレチエ地方で一時的に勢力を持ち、642年には改めてトハリスタンを攻略した。しかし彼のひどい行動によって西突厥の民心が離れ、唐王朝から新たに冊立された乙毗射匱可汗と対抗できず、646年に故地ともいうべき吐火羅（トハリスタン）に逃げ帰ったという[11]。

一方、630年頃と644年頃の二度このあたりを通過した玄奘の『大唐西域記』では、覩貨邏（トハリスタン）は二十七国に分かれ、豪族が競い合ってそれぞれ勝手に君主を擁立しているが、全体としては突厥に隷属していると報告されている[12]。また629/630年に編年されるローブ Rob（現ルーイ Rūy）由来のバクトリア語文書Nでは、ローブの支配者が「栄光ある可汗にお仕えするイルテベル」[13]と呼ばれている。647年に乙毗吐陸可汗は郭葛吐鵄・俟利発（イルテベル）に敗れてペルシアへ逃亡したというから[14]、もしかしたら同じイルテベルかも知れない。さらに652年、阿史那烏湿波

が吐火羅葉護（ヤブグ）となっているから、突厥王族である阿史那氏の血を引く人物を頭にいただくトルコ族のかなり大きな集団がトハリスタンに存在し続けていたことは確かである。[15)]

これ以外にも７世紀のトハリスタンにいた可能性のあるトルコ族としてはハラジュがいる。[16)] ハラジュの起源は北方の天山北麓の草原一帯であり、７世紀以前にトハリスタンに移住したと考えられているが、その中心勢力は７～８世紀にはトハリスタンの南のヒンドゥークシュ山脈を越えて、カーブルやガズニを含む現在のアフガニスタン東部地域に移動してしまっていた。しかし７～８世紀にトハリスタンのローブで書かれたバクトリア語文書にもハラジュが登場するのである。[17)]

以上のような次第であるから、大司教エリアが644年頃に遭遇したトルコ族の一団とは、恐らくトハリスタンにいたものであろう。それがハラジュであるよりも、突厥の別部である可能性の方が遥かに高いと愚考する。ただ残念ながら、この時期以降８世紀前半までの間にトハリスタンにいたとされるトルコ族について、キリスト教徒がいたという確証は見られない。ただし、781年に長安で「大秦景教流行中国碑」の建造に資金提供したキリスト教聖職者で唐朝高官であったイズドブジッド／ヤズドボジッド Izdbuzid / Yazdbozid（漢語名は伊斯）の父ミリス Milis は、トハリスタンのバルフからキリスト僧の身分で中国に来たというから、８世紀前半までにトハリスタンにキリスト教が伝来していたことは疑問の余地がない。[18)]

第２節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その２）

バビロニア（はじめセレウキア＝クテシフォン、775年からはバグダード）に本拠があったキリスト教東方シリア教会（いわゆるネストリウス派のこと）のカトリコス（総大司教；カトリックの教皇に相当する最高位者）であったテモテ一世 Timothy I（在位780-823年）は、大量の手紙を書き残したことで知られている。そのうちの２通（手紙 XLI、XLVII）から、彼の就任までに既にインド人（Hendwāyē）の土地と支那人（Ṣināyē）の土地には大司教座があったこと、彼の就任直後にトルコ人（Ṭurkāyē）のある集団がキリスト教に改宗したこと、その後にそのトルコ人の土地に大司教が任命されたこと、そしてチベット人（Tuptāyē）の土地にも大司教が任命されようとしていた様子が判明する。さらにそのうちの１通には、「トルコ人の王が、自分の国のほとんどの住民と共に、メシアの偉大なお力によりキリスト教を知ったので、古くからの神を持たない誤った状況を離れた」ことや、「彼が私どもへの書簡で、どうしたら自分の王国に大司教を任命できようかと尋ねてきた」ことなどが述べられていたという。[19)]

従来の有力な見解をまとめれば、このトルコ族が大挙してキリスト教へ改宗した年は781-783年のいずれかであり、そのトルコ人の土地への大司教任命は約10年後の792-793年である。アラビア語キリスト教文献の『塔の書』*Kitāb al-Mijdal (The Book of the Tower)* は、後世の11世紀に主要部が書かれたものであるが、そこに関連する記事があり、テモテ一世が「トルコ族の王であるハーカーン（可汗）を改宗させた」[20)]と述べているものの、テモテ自身の手紙にはそんな記載はないというから、後知恵で追加したに相違なく、問題のトルコ族は可汗をいただいていた集団と限定して候補を探す必要はない。

いずれにせよ、この時のトルコ族のキリスト教改宗に関わったのは、バビロニアの本山にいたカトリコス（総大司教）にこの情報を伝えたメルヴの大司教座ではなく、それまでにすでに存在していたサマルカンドの大司教座であろうとディケンズは言う。[21)] サマルカンドの大司教座の設置された正確な年代は不明ながら、どんなに遅くとも８世紀の第１四半世紀（もしくは728年）であるというのが従来の共通認識であるから、[22)] サマルカンドの大司教座からトルコ族のもとへキリスト教の伝道団や商人が送り込まれていたであろうともいうディケンズ説は説得力がある。

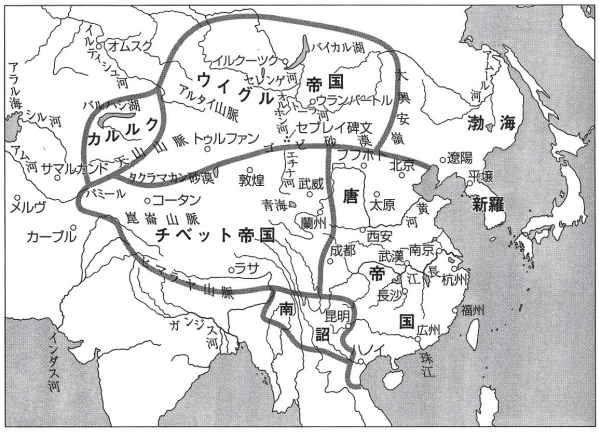
しかしそのトルコ族が何者であり、そのトルコ族のための大司教座がどこに置かれたかについては、学界で百年近く議論の的となってきた。時代と地理を考慮すれば、可能性のあるトルコ族としてはオグズ・カルルク・バスミル・ハラジュ・キーマーク・ペチェネーグ・キプチャク・キルギス・ウイグルなどが挙げられる。ハンター E. C. D. Hunter は1991年論文で、かつてペリオ P. Pelliot が問題の大司教座はシル河北岸のオトラルあたりに置かれたとみなした影響もあってかオグズ説を唱えたが、[23)] ディケンズは2010年論文で先行研究も含めてこれらの候補

を再検討し、最終的に残るのは８世紀中葉以降、西部天山北麓のセミレチエを占拠したカルルクのみであると結論した。[24] 実は問題のトルコ族をカルルクとみなす考えは早くにロシアのクリャシトルヌィやニキーチンやドイツのクリムカイトらが唱えていたのであるが、ディケンズは有力候補であったオグズ・ハラジュ・キプチャク・キルギスではありえないことを論証し、改めてカルルク説を主張したのである。

８世紀後半に天山山脈の北側（天山北路）の西半分に当たるセミレチエ地方（因みに東半分はジュンガリア）で最も勢力を張っていたトルコ族がカルルク（葛邏禄、葛禄）であることは、次のような各種の史料から確実である。

まず漢籍では、『唐会要』巻 100 に「至徳（756-758）後、部衆漸盛（ようやく盛んとなり）、與[2]迴鶻[1]爲[2]敵國[1]、仍（なお）移[2]居十姓可汗之故地[1]、今（の）砕葉（スイアブ）・怛邏斯（タラス）諸城（は）、盡（ことごとく）爲〻所〻踞。然（れども）阻[2]迴鶻[1]、近歳朝貢不〻能[2]自通[1]」とあり、『新唐書』巻 217・回鶻伝附葛邏禄之条に「至徳後、葛邏禄寖（ようやく）盛（んとなり）、與[2]回紇[1]争〻彊（つよさを）、徙[2]十姓可汗故地[1]、盡（く）有[2]砕葉（スイアブ）・怛邏斯（タラス）諸城[1]」（p. 6143）とあり、また『新唐書』巻 215・突厥伝附突騎施之条に「大暦（766-779）後、葛邏禄盛、徙[2]居砕葉（スイアブ）川[1]、二姓（＝突騎施の黒姓・黄姓部落）微（かすかナリテ）、至〻臣[2]役於葛禄[1]」（p. 6069）とある。さらにそのことを傍証する史料としては敦煌出土チベット語文書 P. t. 1283 がある。これは私が詳しく研究し、750～760年代の中央ユーラシア情勢を伝えたものと結論したのであるが、その中に「その（ウイグルの）西方を見ると、カルルク（Gar-log）３部族がいて、軍隊が８千人いる。（このカルルクは）トゥルギシュ（Du-rgyus、突騎施）及び大食（Ta-zhig、タジク）と戦った」という記載がある。[25] このカルルク（Gar-log）３部族が、750 年代後半に建てられたウイグルのシネウス碑文に見える üč Qarluq「３カルルク」[26] に対応し、その内実が漢籍に見える「三姓葛邏禄」ないし「三葛邏禄」の謀落・熾俟（チギル）・踏実力であることは疑いない。地図１はおよそ 790 年代～ 830 年代の唐・ウイグル・カルルク・吐蕃の勢力地図である［出典は森安 2007, p. 353 ＝森安 2016, p. 365］。

カルルク族が原住地であったモンゴル西部のアルタイ山脈周辺～ジュンガリア東部地域から西部天山北麓のセミレチエ地方（現在のキルギス北部～カザフスタン南部）に民族移動していったのは、モンゴリ



唐・チベット・ウイグル三国会盟時の領域

地図１

アに本拠のあった突厥第二帝国を共同で打倒したウイグルとの覇権争いに敗れたからであり、その年代は８世紀中葉のことである。川崎浩孝の 1993 年論文「カルルク西遷年代考」によれば、カルルクの西方移動は二度あった。第一回目は 746 年であり、751 年のタラス河畔の戦いにおいて唐側から大食側に寝返ってイスラム勢力に勝利をもたらしたのは、このカルルク軍団である。しかしカルルクがさらに勢力を増大させるのは、やはりウイグルの圧迫による 754 年の二回目の西方移動によってであり、この合体した大集団が 766 年以降に先住のトゥルギシュ（突騎施）族の可汗の居城であったスイアブ（砕葉）やタラスを占領し、トゥルギシュに取って代わって実質的なカルルク王国を建国したのである。

さらに８世紀末のウイグル対吐蕃の北庭争奪戦では、カルルクは吐蕃（チベット帝国）に味方して天山北路を西から東へ進軍しているし、『新唐書』巻 217・回鶻伝附黠戛斯（けつかつし）之条には北庭争奪戦後の情勢を伝えて、「然（れども）常（に）與[2]大食・吐蕃・葛禄[1]相依仗。吐蕃之往来（する）者（は）畏[2]回鶻（の）剽鈔[1]、必（ず）住[2]葛禄[1]、以（て）待[2]黠戛斯（の）護送[1]」（p. 6149）とあり、チベット高原の吐蕃と、当時は南シベリアにいたキルギスが使者を往来させるためにカルルクの領域を中継地としていた様子が窺えるのであるから、ここの葛邏禄は、吐蕃が中央アジアに進出する際の西ルートであるパミール・ルートに直結する西部天山北麓に拠っていたはずである。そのことはまた北庭争奪戦後の情勢を伝えるカラバルガスン碑文にある記事や、９世紀の最初の四半世紀に天山北路を西から東へ旅して東ウイグル帝国の首都に行ったアラブ側からの使者タミーム＝イブン＝バフル Tamīm ibn

Baḥr が残した旅行記からも裏付けられよう。タミームの記事からは、トグズグズ Tuγuzγuz すなわち言語的には Toquz Oγuz「九姓鉄勒」に対応し、実質的にはそのリーダーであるウイグルの可汗の国へ、可汗が彼のために準備した駅伝馬に乗って旅をしたこと、その駅伝路がセミレチエの東部にまで延びてきていたこと、ウイグルにマニ教が流布していること、ウイグルの騎馬軍団がカルルクのそれよりも遥かに強かったことなどが伺える。[27] カラバルガスン碑文漢文版の記事の詳細については私と吉田豊による最新研究［森安／吉田 2019］に譲るが、その漢文版とソグド語版を比較研究した吉田によって、東ウイグルの第７代・懐信可汗（在位 795-808年）時代に吐蕃と共謀したカルルクがウイグルと戦って敗北し、一時的に勢力を減退させたこと、逆に言えばウイグルが勢力を拡大したことが明らかにされており、[28] タミームの旅行記はその状況を反映しているのである。

第３節　カルルク族の動向とキリスト教信仰

８世紀から９世紀前半までカルルク集団の最高権力者は、カガン（qaγan、可汗）ではなく１ランク下のヤブグ（yabγu、葉護）という称号を用いていた。然るにビシュケク／ピシュペク（旧フルンゼ）付近で出土した一枚のコインのソグド語銘文をロシアのルーリエ P. Lurje が解読したところ、そこには「神なるカルルクのカガン（可汗）の銅貨」と記されていた。[29] ヤブグではなくカガンと名乗っているので、そのコインは 840 年の東ウイグル帝国崩壊以降、カルルク国が最も強大になった時代に鋳造されたものと思われる。これにより、カラハン朝の起源を通説のような 940 年代ではなく東ウイグル帝国が滅亡した 840 年直後にまで遡らせ、伝説とみなされてきた Bilgä Köl Qadïr Qan なる人物を名実ともに独立したカルルク王国の初代可汗とするプリツァク説は、[30] 改めて脚光を浴びることになる。[31] 彼こそがカルルクの君長としてヤブグ号を捨ててカガンと称した最初の人物であるとプリツァクは確信したからである。プリツァクの論証は次のようなものであった。

11世紀末の『カシュガル史』に見える伝承によれば、カラハン朝の最初の君主は Bilgä Köl Qadïr Qan であり、彼とサーマーン朝の Nūḥ b. Manṣūr ar-Rāḍī が聖戦を行なった。その際、Nūḥ b. Manṣūr は Bilgä Köl Qadïr Qan からイスフィジャーブ（＝サイラム）の町を奪い取った。もちろんこの Nūḥ b. Manṣūr は 10世紀のサーマーン朝の君主（在位 976-997年）ではなく、イスフィジャーブを征服した Nūḥ なる人物である。一方、Sam‘ānī によって伝えられた、ブハラの歴史叙述者で製紙業者であった人物の情報によれば、サーマーン朝の Nūḥ b. Asad がヒジュラ歴 225年（西暦840年）に実際にイスフィジャーブを征服したのである。それゆえ、カラハン朝初代君主の Bilgä Köl Qadïr Qan は Nūḥ b. Asad の同時代人であったに違いない。こうしてみれば、カラハン朝初代君主の Bilgä Köl Qadïr Qan と、ガルディージーが Īl.māl.m.s.n Yabġu と呼んでいた最初のカルルクの大可汗とが同一人物（則ち初めて葉護から可汗になった人）であったことは明らかである、という。840年とはまさしく東ウイグル帝国滅亡の年なのである。

ところで 982/983年に無名氏によって編纂され、アフガニスタン北部のグーズガーン地方を支配していた小王朝の君主に捧げられたペルシア語の地理書『世界境域志』*Ḥudūd al-‘Ālam* は、その史料価値が高く評価されている。この『世界境域志』によっても、カルルクがイシック＝クル西方のチュー河流域を中心にして、その周辺からさらに天山南路北道の西部にまで手を伸ばし、全体としては東部天山地方の南北路を支配していたトグズグズ Toghuzghuz（＜ Toquz Oγuz）すなわち西ウイグル王国と隣接していたことが見て取れる。[32] このカルルク国は、セミレチエを本拠にしながら、天山南路北道の西半分にまで勢力を伸ばしたこともあり、[33] 少なくともサーマーン朝（875～999年）のアミール・イスマイールに破れ、タラスにあった大きなキリスト教会がモスクに変えられる 893 年（後述）までは確実に、おそらくは『世界境域志』の編纂年である 982/983 年に近い頃まで存続したはずである。とすれば、テモテ一世の手紙に見えるような、集団としてキリスト教に改宗しつつあったトルコ族とはカルルクであった蓋然性がますます高くなる。[34]

ただしここに一つ気になる点がある。ヤークービー（891年）によると777年後間もない頃にアッバース朝のカリフ・マフディ al-Mahdī（在位 775-785年）が臣属するように求めて使者を送った相手のリストに、カルルク王のヤブグ、チベット王、トグズグズ王のハーカーン（可汗）、支那王の天子、ソグドの王イフシード、その他多数が列挙されるが、そのう

ちのカルルクのヤブグがイスラム教を受け入れてしまったと伝えられている事である。[35] バルトリドやゴールデンはそのヤークービーの記述に疑念を抱くが、[36] 吉田豊はミノルスキーらと同じくそれを史実と認めている。[37] そればかりか私との個人的通信によれば吉田は、このイスラム教を受け入れたカルルクのヤブグを「くせ者の葉護」と呼び、これとテモテ一世の時にキリスト教に改宗したトルコ族のリーダーを同じ人物とみなせるのではないかという。なぜなら彼こそウイグルの懐信可汗がまだ宰相であった時代からの宿敵で、北庭争奪戦の時も含め長年に亘って悩まされてきた因縁の相手に相違なく、そういうしたたかな人物であれば自分に都合の良いようにイスラム教にもキリスト教にも秋波を送った可能性はじゅうぶんあるからである。[38]

従来、カルルクがキリスト教に改宗した理由として挙げられているのは、主に政治的なものである。すなわち東のウイグルがマニ教を、西のハザールがユダヤ教を、東南の吐蕃が仏教を、西南のアッバース朝がイスラム教を奉じているのに対抗したとするものである。[39] もしヤークービーの記事が正しいとしたら、778/779 年頃に一旦はイスラム教を受け入れたカルルクの葉護が、わずか数年後の 781–783 年にはキリスト教に改宗したことになるが、それは十分ありえるように思われ、私は吉田説に賛成したい。

またタバリー（d. 923）によれば、アッバース朝のマームーン al-Ma’mūn がカリフ（在位 813–833年）になる前の 811 年、現カリフのアミーン al-Amīn（在位 809–813年）に戦いを挑もうとした時、カルルクのヤブグとチベットの可汗が臣従を拒否してきて困ったので、大臣の忠告に従って本領安堵と敵対勢力との戦いに援軍を送る約束をして味方に付けたという。[40] これまたいかにも「くせ者の葉護」らしい振る舞い方である。

さてナルシャヒーの有名な『ブハラ史』（943/944）によれば、マーワラーアンナフル（＝トランスオクシアナ）を支配していたサーマーン朝の第３代君主であるアミール・イスマイール（在位 879–908年）が893年に北方のトルコ族の国へ戦争に出かけていき、敵の重要拠点であるタラス攻略に難渋したが遂に勝利した結果、タラスのアミールは多くのディフカーン（郷紳）たちと共に投降してイスラム教を受け入れ、大きな教会がモスクに造り変えられた、という。[41] プリツァクは、このアミールを、Bilgä Köl Qadïr Qan の息子で副カガンとしてタラス地方にいたオグルチャク Oγulčaq Qadïr Qan とみなしている。[42] 一方、タバリー（d. 923）によれば、イスマイールはトルコ人の土地を襲撃し、その首都を征服し、１万人の男と共に王の妻であるハートーン（可敦）を捕虜にしたという。[43] さらにマスウーディー（d. 956）は、イスマイールが 893 年にトルコ族の土地へ進撃して、その首都と見なされる都市を征服し、１万５千人の男と共に王の妻であるハートーン（可敦）を捕虜にしたが、そのトルコ族をカルルク（Arab. Kharlukhiyya ＝ Turk. Qarluq）とみなしている。[44] 妻がハートーン（可敦）であったからには、夫はハーカーン（可汗）であった可能性が高い。先に私は、ルーリエが銘文を解読したコインに「神なるカルルクのカガン（可汗）の銅貨」と記されていたことを紹介し、それは９世紀中葉以降、カルルク国が最も強大になった時代に鋳造されたものであろうと述べておいたが、その推測を傍証することになろう。

従来の通説では940年代に成立したとされるトルコ系のカラハン朝を建てた王族の起源は、カルルク・ウイグル・チギル・ヤグマーのいずれかであったとされてきたが、いまだに判然としない。日本では羽田亨・田坂興道・安部健夫・松田壽男・小田壽典ら錚々たる面々がウイグル説をとっている。[45] 一方、欧米学界では古くはヤグマー説も含めいろいろあったが、[46] 1951年にプリツァクのカルルク説が出て以来、それが優勢となり、我が国でも山田信夫・代田貴文がカルルク説に与している。[47] 私はどちらかといえばカルルク説に近いものの、[48] まだいずれとも決めかねている。[49] 伝説ではカラハン朝初代のサトゥク＝ボグラ＝ハン（955/956年没）が950年頃にイスラム教に改宗し、960/961年にトルコ族の20万帳がイスラム教に改宗したという。この点は、第７節で紹介するような、1007年に東方トルコ族（一説ではケレイト族）の20万人がその君長に倣ってキリスト教に改宗したという話と奇妙によく似ているが、偶然であろうか。

テモテ一世の伝えたトルコ族がカルルクだとすれば、カルルクは少なくとも８世紀末からサーマーン朝のイスマイールに敗れる 893 年までの約 100 年間は、キリスト教を奉じていたことになる。そうだとすれば、遅くともカトリコス（総大司教）エリア三世（在位 1176–1190年）の時代までにカシュガルに大司教座が置かれたことも、[50] 説明がつきやすいとディ

ケンズはいう。[51] なぜなら、タラスでイスマイールに敵対していたのは、東ウイグル帝国滅亡後に名実ともに独立したカルルク王国の初代可汗となったBilgä Köl Qadïr Qanの息子のオグルチャクOγulčaq Qadïr Qanであり、彼が893年の敗北によりカシュガルに撤退し、そこで彼の甥（もしくは息子）であるサトゥクがイスラム教に改宗したとされているからである。[52] 遅くとも10世紀中葉に建国したカラハン朝は、10世紀後半にカシュガルを本拠として東西両面の敵と戦った結果、999年にはトランスオクシアナのサーマーン朝を打倒し、1006年には東のコータン仏教王国を占領した。ディケンズは、カラハン王家がかつてはキリスト教徒だったという記憶が、カシュガルに東方シリア教会の大司教座を設けるのに有利な雰囲気をかもしたのであろうと考えたのである。[53] ガルディージー（ca. 1050）はコータンに二つのキリスト教会があったと伝えているが、[54] それもほぼ間違いなくカラハン朝支配時代の状況であろう。

903年以降にダマスカスの大司教となったEliya Jawharīが作成した大司教座のリストには、ヘラート・メルヴ・サマルカンドの大司教座は見えるがトルコ族の大司教座は見えないので、恐らくサーマーン朝がカルルクを征伐した（すなわちタラスを征服し、キリスト教会をモスクに変えた）時、つまり893年から間もない頃に廃止されたのだろうとディケンズは推測している。[55] またムカッダシー（985）は、タラスの東方160㎞にあるMīrkī（メルケ）[56]のモスクも、以前はキリスト教会であったと報告しているという。[57]

第４節　セミレチエのキリスト教遺跡・遺物とマニ教の痕跡

セミレチエ、とりわけその西部にあたるチュー河～タラス河流域はいわゆる農牧接壌地帯である。古くはサカ・月氏・烏孫など純粋な騎馬遊牧民の天地であったが、ソグド人が盛んに植民活動を行なって多数の城郭都市を設置した５～６世紀以降は、ソグド人植民都市周辺の農耕地と、突厥・トゥルギシュ（突騎施）・カルルク等のトルコ系諸民族の遊牧地とが共存するようになった。

ほぼカルルク支配時代と重なる８～10世紀のチュー河～タラス河流域からは、キリスト教信仰を示す考古遺物が少なからず出土している。チュー河流域のアクベシムAk Beshim遺跡（中世のスイアブ＝砕葉／素葉）[58] では二つキリスト教会が部分発掘され、少なくともその一つは８世紀に建立されたものとみなされ、[59] 教会そのものからではないが同じ遺跡の別の地点からソグド語銘文の鋳込まれた青銅の十字架[60]が出土している。また胸に着ける十字架はアクベシムだけでなく、同じくチュー河流域のクラスナヤ＝レチカKrasnaya Rechkaとブラナ Buranaからも出土している。[61] さらにチュー河～タラス河流域のいくつもの遺跡（クラスナヤ＝レチカやアクベシムも含む）からは、葡萄酒を貯蔵するための陶製の大甕がたくさん出土しているが、[62] それらはどれも似たような形状をしており、その中には焼成前に口縁部ないし側面にソグド語銘文が彫りつけられたものが七つほどある。それらのソグド語銘文は書体や用語などからおよそ８～10世紀に編年されるようであるが、[63] そのうちの一つはアクベシムの葡萄酒製造施設を持つキリスト教会址の床に、他の十数個の無銘の大甕とともに埋められていた。[64] それらの銘文にはアーメンという言葉やキリスト教聖職者の称号も見えるので、全体としてキリスト教徒の遺物とみなされている。注目されるのは、ソグド語銘文中に見える人物名がヤルク＝テギンYaruq Teginとかアルプ＝ビルゲAlp Bilgäとかイル＝タグIl Taγとか、いずれもソグド語ではなくトルコ語であることであり、その事実はこれらをカルルク支配時代の遺物であるとみなすことを有利にしてくれる。またタラスからは、ペテロやガブリエルというクリスチャン名の見えるシリア語銘文を持つ遺物や、十字架の描かれたオッスアリ（納骨器）や陶器の断片が出土している。[65]

カラハン朝時代の11世紀後半にはセミレチエ西部のチュー河～タラス河流域においてソグド語・ソグド文化が衰退し、トルコ化の波に飲み込まれようとしていたことはカーシュガリーの有名な記事[66]からも知られているが、まさにそうした文献学的証拠と上記の考古学的証拠とは見事に一致している。[67] 洛陽から新たに出土した９世紀前半の景教経幢に登場する人物が、米姓・康姓・安姓という典型的ソグド人であることに鑑みても、[68] カルルクのキリスト教への改宗は、キリスト教信仰をセミレチエに持ち込んだソグド人に影響されたものとする見方は極めて蓋然性が高いと思われる。

1880年代以降、現在のキルギスのチュー河流域のビシュケク／ピシュペク（旧フルンゼ）やトクマクの南にあるブラナ（旧ベラサグン）[69]の周辺の墓地から

600個に及ぶキリスト教徒の墓誌が見つかっている。[70] ほとんどが丸っこい自然石に、ネストリウス派キリスト教会特有の末広がりの十字架と共にシリア文字でシリア語ないしトルコ語の銘文が浅く彫り込まれている。人名から判断して、被葬者の大部分がトルコ語話者と想定されている。先に言及したように、カーシュガリーによれば11世紀のセミレチエ西部ではソグド人のトルコ化が進行していたのだから、本来のトルコ人だけでなく、ボルボーネ P. G. Borbone も言うように、中にはトルコ化したソグド人も含まれていたに違いない。[71] 紀年にはアレクサンダー帝国を受け継いだセレウコス朝シリアの暦（初年は紀元前312年）と、中国から内陸アジアに流布した十二支紀年の両方が使われており、西暦では13世紀初頭から14世紀中葉に相当する。[72] それゆえ、これらがかつての９世紀前後のカルルク国の直接の後裔たちが残したものと即断はできないが、その可能性は決して低くない。

というのは、最初のトルコ系イスラム国家となったカラハン朝統治下であっても、全住民が直ぐにイスラム教一色になったわけではないことが我々によって証明されているからである。すなわち西部天山北麓のアルグ Arghu 地方（タラス河～チュー河流域）にはマニ教徒が残っており、それが東部天山地方トゥルファン盆地の西ウイグル王国統治下のマニ教会と密接に繋がっていたことが、吉田豊教授の協力を得た私の研究で明らかになったのである。[73] 同様の事態がキリスト教徒にも起こったと考えられる。

具体的に言えば、私が研究したのはトゥルファン出土のマニ教ウイグル語文書 T II D 171（＝ MIK III 198）と M 112 verso であり、前者の奥書[74]から、11世紀の第１四半世紀にカラハン朝支配下の「アルグ・タラス国」、すなわちタラス河～チュー河流域に、チギル族の支配者などに率いられたマニ教徒の集団があって、それが西ウイグル王国統治下にあったトゥルファンのマニ教会と密接な関係を維持していたことが判明した。そのチギル族とは元来はカルルクを構成した三つの部族の一つ（漢籍の職乙 *tśi̯ěk-i̯ět ／熾俟 *tś’i-i̯ět）であるが、『世界境域志』にも示されるとおり10世紀後半までには独立して強力な集団になっていた。

さらに M 112 文書の裏面のウイグル語文書からは、10世紀後半にアルグ地方からトゥルファンにやって来たマニ教徒のケッド＝オグル Käd Oγul が、西ウイグル王国においてそれまで国教であったマニ教が仏教に圧迫されつつあるのを見て危機感を抱き、その状況を次の世代に伝えるために書き留めたことが判明した。[75]

一方、10世紀の有名なアラビア語文献であるアン＝ナディームの『フィフリスト』のドッジ版［Dodge 1970, p. 33］に「ソグドは上イランと呼ばれ、トルコ族の住地である。その主要都市は Tūnkath である。・・・そこの人々は二元論者（＝マニ教徒）とキリスト教徒である」と記されている。その Tūnkath を、ドッジはタシケント付近の町と考えた。しかしその後、この Tūnkath はアラビア文字でよく似ている Nawīkath と読むべきであるとの見解が幾人もの学者によって出され、それが有力となった。そこで私はそれを採用し、且つ唐・賈耽の『皇華四達記』に見える「新城」が現在のチュー河流域にあるクラスナヤ＝レチカ遺跡であるという定説の上に、それをイスラム史料の Nawīkath「新しい都市＝新城」に比定するというある程度流布している説と組み合わせた。[76] こうして10世紀のチュー河流域のトルコ人たちの宗教が、マニ教とキリスト教であることが判明したのである。

つまりカラハン朝がトルコ族による最初のイスラム王朝だからといって、その初期である10世紀後半から11世紀前半にかけて、領域内がほぼ完全にイスラム化していたとみなすのは大きな誤りなのであり、そこにはキリスト教徒もマニ教徒も厳然として存在していたのである。982/983 年編纂の『世界境域志』のカルルクの条には、その国内のバルスハンをはじめ数カ所に、トグズグズ（＝ウイグル）に親しい住民がいたことが明記されていること[77]にも注意したい。さらに、上述したようにルーリエが発見したカルルク可汗のコインを紹介した吉田豊は、同じくセミレチエでソグド語で書かれた東ウイグル帝国時代のウイグルのコインと、ウイグル語で書かれた西ウイグル王国時代のコインが出土したことも明らかにしている。[78] 第２節の末尾で言及したタミームの記事やカラバルガスン碑文から明らかなように、東ウイグル時代には一時的にせよセミレチエ東部にまでウイグルの勢力が及んだのであり、西ウイグル時代にはたとえカルルク国と敵対していても人の交流や交易は普通に行なわれていたとみなせばよいのである。

カラハン朝の次はカラハン朝を従属下に置いたカ

ラキタイ帝国（1132～1211年）の時代になるが、カラキタイは宗教に寛容であり、被支配者の宗教を無理に変えさせるような政策は採らなかった。それだけでなく、カトリコス・エリア三世の在任時（1176-1190年）に、カシュガルに連続して二人の大司教が任命されたことが東方シリア教会側の史料から判明しており[79]、それもカラキタイ時代のことである。第10節でも改めて言及するが、14世紀には「カシュガルと Nawīkath の大司教」という連名で呼ばれる大司教座があった[80]。ナウィーカット Nawīkath はソグド語で「新城」という意味であり、先ほど述べたように、私はこれを現在のクラスナヤ＝レチカ遺跡に比定した。ドーヴィリエ Dauvillier 1948 論文は今とは資料状況が違うため苦労して「カシュガルと Navēkaθ の大司教」の Navēkaθ についてあれこれと考察を巡らしているが、結局は我々と同じ結論になるようであり、1973年に出版されたペリオの遺稿ではほとんど論証抜きで同じ考えを採り、13～14世紀にチュー河流域の墓地に多数のシリア文字の墓誌を残したキリスト教徒もこの大司教区に所属していたとみなしている[81]。前述したようにクラスナヤ＝レチカからはキリスト教徒がワイン醸造のために使ったと思しき銘文付きの大きな甕の口縁部が出土しており[82]、私はテモテ一世の時にカルルク支配下のスイアブ（アクベシム遺跡）に置いた大司教座[83]が、カラキタイ時代にはその首都となったベラサグン（ブラナ遺跡）と並ぶ大都市のナウィーカット（クラスナヤ＝レチカ遺跡）に移動し、さらに天山南路のカシュガルと一体となる大司教座を形成したのではないかと推測する。なぜならキリスト教会を含むスイアブ全体が既にカラハン朝時代の11世紀には廃墟化しつつあったからである[84]。

以上の考察がまちがっていないとすれば、９世紀前後のセミレチエにあったカルルク国で流布していたキリスト教が、カラハン朝とカラキタイの時代を乗り越え、13～14世紀のモンゴル時代まで生き残った可能性はおおいにあるのである。

元朝において色目人筆頭の地位を獲得するのは文武両面で帝国に貢献したウイグル人であるが[85]、セミレチエ東北部のイリ河地方（アルマリクとカヤリクが中心）に生き残っていたカルルク人もそれに次ぐ地位を獲得した。その由来は、アルスラン＝ハンに率いられたカルルク軍団がカヤリクからチンギス＝ハンの西方遠征軍に加わったことにある。もし13～14世紀のモンゴル時代にもカルルク人がイリ河地方だけでなくチュー河地方にも居住していたことが証明されれば、カルルク人は500年以上の長きにわたってキリスト教信仰を維持してきたと言えるのである。

そのことを証明するのは難しいが、僅かな手がかりはある。先に紹介したチュー河流域の墓地で見つかった600個に及ぶキリスト教徒の墓誌は、13世紀初頭から14世紀中葉のものであり、ほとんどが現地にいたトルコ語を話すキリスト教徒のものである。ところがその中に、あくまで佐伯好郎の解読[86]が正しいと仮定してのことだが、７人のアルマリク（イリ河流域）出身者が混じっており、他にはカシュガル出身者とウイグル人・モンゴル人・シナ人・アルメニア人がそれぞれ１人づつ存在するのである。つまり13～14世紀においてもイリ河流域のキリスト教徒とチュー河流域のキリスト教徒の間には密接な交流のあったことが窺えるのである。さらにまた、ラシード＝アッディーンの『集史』にはタルサーケント Tarsakent すなわち文字通りには「キリスト教徒の町」[87]というものが見えており、それはビシュケクの付近にあったトルコ語を話すキリスト教徒の居住区とみなされるという[88]。もしかしたら、このタルサーケントは先のナウィーカット（クラスナヤ＝レチカ遺跡）に相当するのかも知れない。

第５節　西ウイグル王国のキリスト教

私の学問的功績の一つは、西ウイグル王国（９世紀中葉～13世紀初頭）ではマニ教がモンゴル時代まで生き延びたとする長期説を退ける一方、西ウイグル王国の国教が10世紀後半～11世紀前半を過渡期としてマニ教から仏教に交替し、12世紀以降はマニ教徒の姿はほとんど消え去ってしまうことを博士論文で論証したことである[89]。またそれ以外の諸論考でもマニ教徒や仏教徒にはしばしば言及してきたが、キリスト教については本格的に考察を加えたことがなく、トゥルファン出土文書に関する多くの先行研究から、西ウイグル王国およびモンゴル時代のウイグリスタンにも少数派ながらキリスト教徒が存在していたことを認識していたにすぎなかった。ようやく2019年12月に出版された拙著 *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road* において、多数のマニ教徒・仏教徒の手紙に混じってキリスト

教徒の手紙も紹介し、先学の驥尾に付すことができたのである。

これらのいわば内側の史料に対して、外側から西ウイグル王国におけるキリスト教の存在を裏付ける史料として既によく知られているのは、次の通りである。いずれも10世紀後半以降のものである。西方のペルシア語史料としては、『世界境域志』（982/983）がトグズグズの国、即ち西ウイグル王国のおそらく天山北麓にあるソグド人の集落にキリスト教徒とゾロアスター教徒がいることを伝え[90]、ガルディージー（ca. 1050）は西ウイグル王国にマニ教徒と仏教徒とキリスト教徒とゾロアスター教徒がいると報告している[91]。東方の漢文史料としては、982 ～ 983年に西ウイグル王国を訪問し滞在した宋使・王延徳の旅行記である『高昌行記』、及び敦煌文書のＳ6551『仏説阿弥陀経講経文』が、西ウイグル王国の盛んな仏教信仰を伝えるとともに、摩尼寺・摩尼仏、波斯僧・波斯仏、火祆仏がいたこと、すなわちマニ教・キリスト教・ゾロアスター教の存在に言及している[92]。『宋史』外国伝・高昌国之条には『高昌行記』を引用した後に、「雍熙元（984）年四月、西州回鶻は婆羅門僧永世・波斯外道阿里烟と同ともに入貢す」（『宋史』p. 14114）とあるが、その「波斯外道」すなわちキリスト教徒とは、西ウイグル王国に定住していたキリスト教聖職者を指しているというのが従来の見方である[93]。とはいえ、もしかしたらカラハン朝統治下のセミレチエやカシュガル、あるいはサーマーン朝[94]統治下のサマルカンドやメルブなどにあった大司教区・司教区から派遣されてきたキリスト教宣教師である可能性もないとはいえない。

モンゴル帝国時代の13世紀に西欧からモンゴルまで旅行したカルピニ出身のヨハネとルブルク出身のグリエルムス（ギヨーム、ウィリアム）のうち、前者はウイグル人はネストリウス派のキリスト教徒であると述べていて、仏教についてはほとんど言及しないが、それは彼自身の興味による偏見であろう。一方のルブルク出身のグリエルムスはウイグル人は仏教徒で、ネストリウス派キリスト教徒もいると報告しているが、それが正しい認識である[95]。またマルコ＝ポーロは、ヤルカンド・タングート（旧西夏領）・ウイグリスタン（旧西ウイグル領）・ギンギンタラス・エグリガイア（寧夏）・天徳（オングート領）などにネストル教徒がいることを報告している[96]。

トゥルファン盆地から出土するおよそ10世紀から14世紀までのキリスト教文献はシリア語・ソグド語・ウイグル語・中世ペルシア語・近世ペルシア語の聖典類や各種世俗文書と多岐に亘るが、それらの大部分が出土したのはほとんど同じ場所である。それは現在のトゥルファン市の北方10㎞弱で、天山からの雪解け水が火焔山を貫いてできた谷間にある葡萄溝という集落一帯である。その集落は西ウイグル王国時代からモンゴル時代まではウイグル語でビラユク（Bïlayuq）と呼ばれていたが、近現代にはそれが訛ってブライク／ブラユク（布拉依克 Bulayïq / Bulayuq）やブルイク／ブルユク（Buluyïq / Buluyuk）、さらにブイルク（布依魯克 Buyiluke）とさえ呼ばれるようになった[97]。ドイツのトゥルファン探検隊が多くのキリスト教文書を発掘した遺跡として挙げられるのはブライク Bulayïq とクルトカ Kurutka / Qurutqa の二つであるが、そこでブライクという場合は葡萄溝の集落ではなく、直ぐ近くで火焔山中腹にある Šui-pang / Shipang（水盤／西旁）という遺跡を指している[98]。一方、クルトカというのは、葡萄溝と同じ谷間であるが、ブライクの西に位置する別の小さい集落の名前であり、そこにも遺跡があったのである[99]。

西ウイグル時代のトゥルファン盆地にいたキリスト教徒の由来は不明であり、840年代に唐帝国で起きた「会昌の廃仏」という仏教弾圧と合わせてマニ教・景教・祆教が弾圧された時に逃げてきたのではないかと推測する人もいるが[100]、それよりはむしろソグド本国やソグド人の植民地ともいうべきセミレチエとの繋がりを模索する方が生産的であろう。なぜならトゥルファン出土のキリスト教文書にはシリア語とソグド語とウイグル語のものが大部分であり、西ウイグルの日常語であるウイグル語と東方シリア教会の典礼用語であるシリア語以外にはソグド語が際立っているからである。陳懐宇は例の893年のサーマーン朝によるタラス征服時にキリスト教徒が亡命してきた可能性を指摘しているが[101]、私はむしろセミレチエにあった大司教区、すなわちテモテ一世がトルコ族の土地に置いた大司教座で当初はスイアブに、後には新城＝ Nawīkath に移動したと思しきものとの関係を重視したい。というのは前節で言及した通り、カラハン朝統治下のセミレチエにはトルコ人のマニ教徒もキリスト教徒もいて、そのうちのマニ教徒はトゥルファン盆地のマニ教団と密接に結び付いていたことが判明しているからである[102]。さら

にキリスト教徒については吉田豊が、トゥルファンのブライク遺跡から出土したキリスト教ソグド語文献には二つの方言差が見られ、その一つはセミレチエに移住したソグド人の使った方言であるとする、大胆だが魅力的な新説[103]を発表していることを紹介しておきたい。

いずれにせよセミレチエとトゥルファンに遠く離れていたキリスト教徒やマニ教徒の結び付きを可能にしたのはやはりシルクロードの商人たち、具体的にここではトルコ化したソグド商人、私のいうソグド系ウイグル商人[104]の活動であったろうと思われる。

21世紀に入ってから、カラハン朝・カラキタイ・モンゴル時代史の研究で活躍しているビラン M. Biran は、10～12世紀を陸のシルクロードの暗黒時代とみなす従来の見方は間違いであるとする主張を繰り返し、とりわけカラハン朝と遼（契丹）帝国との交流に注目している[105]。その趣旨と論拠となる史料は、先行する我々の論著と重なるところが少なくないが、彼女は日本語が読めないらしく、代田貴文や私の論著に全く言及していない。それはともかく、カラハン朝と遼（契丹）との間に相当密接な貿易関係があったとする彼女の論文によれば、遼からカラハン朝への輸出品の代表は麝香（じゃこう）[106]や高級毛皮や陶器や高級絹織物であり、逆にカラハン朝から遼への輸出品の代表は玉や乳香やガラス器（いわゆるイスラム＝グラス）やバルト海産の琥珀[107]やアラビア文字銘文付きの金属容器であるという。イスラム国家のカラハン朝が東方の仏教国ともいうべき遼（契丹）帝国と通交する際には、当然ながら中間に位置する西ウイグルや西夏を仲介にしたはずである。その際には、第三の宗教であるキリスト教の商人が何かと便利だったのではなかろうか。なぜならイスラム教徒にとって偶像教徒である仏教徒は唾棄すべき存在であったが、キリスト教徒はいちおう啓典の民として許容できたからである。

第６節　西ウイグル王国のキリスト教手紙文書

さて次に紹介するのは、トゥルファン盆地のブライク遺跡から出土し、現在はベルリンに保管されているウイグル語の本物の手紙である。以下は、拙著 *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road* よりの抜粋であり、実際は全て英語であるが、ここには便宜のため元になった日本語と入れ替えたり、新たに日本語を加えたりしている。ただし一部英文のままの引用があり、また引用文献の略号は本稿には繰り返さないので、*Corpus* 本体を見られたい。

COUL no. 04 = U 3890 recto

［表裏の写真は巻頭図版 2-2 を参照］

半楷書、キリスト教、手紙、実物、A式（上行特定ヴィジュアル版）

U 3890 (T III B), held by BBAW; from Bulayïq in Turfan.

A Christian-cum-commercial letter[108] actually sent (clear traces of folding). Type A.

Semi-square. 17 lines (not complete). Verso: 32 lines of other Uighur Christian text in Syriac script.[109]

Cit.Cat.) Zieme 1974, p. 666; AtHDok. 1, no. 43 (Official Letter); Raschmann 2009, “Christian Communities,” p. 414; Epi. Form. 2, p. 37; Zieme 2015a, “Notes sur les textes chrétiens,” pp. 191–192; Zieme 2015b, ATKOZ, p. 31, fn. 117.

Pap.) 35×24 cm (height and width); medium-thick? (behind glass); traces of coarse ribs; beige rosé ~ chamois α; slightly uneven; medium-quality.

Note) ウイグル文字面の縦書きを基準にして、縦横 35×24 ㎝である。紙の漉き縞の方向から見て、本来、縦（高さ）が 35 ㎝もあったやや大きいサイズの一枚紙を 24 ㎝の幅で切り取って使ったと思われる。この手紙は上行文書の A 式であるにもかかわらず、まったく挨拶文言がない例外的なものである。受取人はウイグル王族であるから、差出人であるキリスト教僧侶の立場が相対的に優位にあったのかもしれないが、本当の理由は不明である。本 *Corpus* に含まれる他の例も考慮すると、もしかしたら、挨拶文言がないのはキリスト教徒の手紙に特有の習慣であったかもしれない。なお、本テキストに含まれるシリア語からの借用語に関する知識はすべてツィーメ P. Zieme 教授の教示によるものであり、記して感謝したい。

Text:

（凡例：**太字**は完全破損部の復元、*斜体*は残画あり）

01)　] **tigi**n tängrim qutïnga　<blank>

02)　<blank>　qoš qav’asuna sugvar ötügüm *täginü***r** /////

03) mäning b*ir* uluγ šünkim avya iki ygrmi san tavar t**ört?** (or t**oquz?**)

04) ayaq iki anapor bir kolvatun šikt*an* bir küp bor b*u* **munča**

05) tavar küčin alï täginti**m ä**rti ol uγurqa t*igi*n tängri*m* q**utïng***a*
06) ötünü tägintim ä**rt**i bu mu*n*ča **ta**var il yunglaqï bolzun t*ip* ötünü
07) tägintim ärti amtï bu munča tavarïγ alsar almasar tigin tän*gri*m qutï
08) bili yarlïqar ärki yinä bir *ö***t**ügüm yigäṭmiš bilgä tän*gri* ilig
09)] **tarï***γ*laγ-nïng yir **s**u*v* [ ] •••••
10)] *b*arča bošuyu Y[ ] ••••
11)] **öt***ü*nü täginür ärtim *T*•[ ] ’W[
12)] tapïnur ärti ’YK•••[ ]YNK
13)] *s*aγṭïč bit••[ ]Y bir
14)] **ti**gin tängrim *qu***tï** [ ]•miš
15)] tägingäy ärtim **mä***n*(?) äp**i***sq*opa birlä
16)]dä k**i**n [ ]WK turu tägingäy
17)]•••[ ]• käli täginür tun kö*r*

和訳：

01) / / / / / / 王子（*tigin tängrim*）殿下へ。
02) 私、キリスト教僧侶（*sugvar*）のコシュ＝カヴアスナが言上致します。/ / / / / /
03-08) 私の１つの大きな絨錦製のストール、12 個数の緞子、４つ（or ９つ？）の聖餐杯、２つの聖容器覆い（*anapor*）、１式のトング（*kolvatun*）付き聖体皿（*šiktan*）、１甕の葡萄酒、以上の財物を私は苦労して入手致しました。まさしくその時に、私は王子殿下（*tigin tängrim quti*）に言上し奉りました。「これらの財物は国家用となれかし！」とて献上申し上げました。今、これらの財物を受け取られるかどうか、王子殿下は承知（＝関知）していらっしゃいますね。
08-17) また私からの言上：Yigädmiš Bilgä Tängri Ilig（西ウイグル国王）が / 田地 / すべて解放 / 言上し奉りました。/ 礼拝していた（or お仕えしていた）。/ 同僚 / 王子殿下 / 私が〜〜し奉ることになっていた。［私は？］司教（*äpisqopa*）と共に / 以後 / 留まってさしあげるだろう / 来てさしあげる。平安を享受されよ！

Commentary:

01, 05, 07, 14) tigin tängrim qutï # １行目の行頭のスペースの大きさから見て、*tigin tängrim qutï* という王族の称号の直前に、例えば uluγ “great” とか ïduq “divine” という形容詞、もしくは人名要素の名詞が１語あったと思われる。後ろの５行目、７行目、14行目では繰り返しなので、その１語が省略されていると判断する。

02) sugvar # これはソグド語 *swkβ’r / swqb’r / swγβ’r / swgb’r* “monk; especially Christian monk” からの借用語である［cf. DTSTH, p. 60 ＝ TSDD, p. 72, F20.1; Zieme 2015b, pp. 37, 239; Sims-Williams 2016, *A Dictionary,* p. 178］。

02) ///// # ここには mänかtaqïかamtïなどの１語があったと思われる。

03) šünkim # これは *žünkim* のことで、漢語「絨錦」からの借用語。高級絹織物の一種である［cf. 森安 1991『マニ教史』pp. 90–91, 161 ＝ Moriyasu 2004, pp. 112–113, 194; 森安 2015, p. 431, n. 3 & fn. 15］。

03) avya # < Syr. ‘*by*’ “tunica, pallium; a kind of long stole above the vestment itself” ［cf. Zieme 2015b, ATKOZ, p. 31, fn. 117］.

03) iki ygrmi san tavar # 梅村 1987, p. 53, *ll*. 192–193 に altmïš san tavar bäläk「60 個の商品の梱包」という表現が見える。この場合の tavar は確かに「商品」でよい。tavar という語は、トルコ民族が遊牧を主な生業としていた古い時代には「家畜」とか「財産 property」の意味しか持たなかったが、徐々にシルクロード貿易に関わるようになると新たに「商品」とか、商品の代表格であった「高級絹織物」一般を指す場合が多くなり、さらに具体的に「緞子 satin damask」をも意味するようになった［cf. ED, p. 442b; 森安 1988, pp. 426–427 ＝森安 2015, pp. 497–498］。Although the basic meaning of *san* is “number,” I would like to translate the phrase *iki ygrmi san tavar* as “12 pieces of satin damask.” In my opinion this “piece (*san*)” should correspond to *baγ, sïngar*, *ilätü*, etc. which have the meaning 1 *duan* 端 (＝ ½ *pi* 匹) as demonstrated in Commentary on COUL no. 54.

04) ayaq # これは “a vessel; cup, goblet, bowl” という意味の一般的な単語であるが、ここでは特別にキリスト教徒の儀式で使う金属製の聖餐杯 “chalice, i.e. the sacred wine cup used in the Eucharist” を意味しているらしいことが文脈から判断される。

04) anapor # A loanword via Syriac from Greek *ἀναφορά*, referring to the anaphora, or veil used to cover the chalice and paten before the mass［cf. Zieme 2015b, p. 31, fn. 117］. ミサの前に聖餐杯と聖体皿（＝パン入れ皿）を覆っておくヴェールのことである。

04) kolvatun # < Syr. *klbtwn* “tongs, forceps,” with which a priest can pick up and distribute sacred bread［cf. A. J. Maclean, *Dictionary of the Dialects of Vernacular Syriac,* Oxford, 1901, p. 132b; Zieme 2015b, p. 31, fn. 117］.

04) šiktan # < Syr. *škynt’* “reliquary”［cf. Zieme 2015b, p. 31, fn. 117］. 原義は「聖遺物容器」であろうが、ここでは具体的に聖体皿（＝パン入れ皿）を指しているであろう。

06) il yunglaqï # この術語は “use of the community, use of the state” すなわち「共同体用、国家の御用」という意味になる。*yunglaq* については、森安 1992「ウイグル文書箚記（その三）」『内陸アジア言語の研究』7, pp. 43–50 を参照。

08) yinä bir ötügüm # A polite form of postscript formula, cf. Epi. Form. 2, pp. 36–37.

08) yigädmiš bilgä tängri ilig # この一句は直訳すれば “successful, wise and godlike king” となるが、ここでは Yigädmiš Bilgä Tängri Ilig という西ウイグル国王の名称であるとみなすべきであろう。*bilgä tängri ilig*「賢き天王」の部分はどの国王にも使用され得るので、ここでこのウイグル王を特定するキーワードは Yigädmiš である。因みに、東ウイグル時代の有名な牟羽可汗は新発見のカリチョル Qarïčor 墓誌銘では Bögü Bilgä Tängri Qan「牟羽なる賢き天汗」と呼ばれていたし、10〜11世紀の西ウイグル王国には、Il Bilgä Tängri Ilig や Arslan Bilgä Tängri Ilig や Bögü Bilgä Tängri Ilig という国王が存在した［cf. 森安 1991『マニ教史』p. 183 ＝ Moriyasu 2004, pp. 222–223］。ここに Yigädmiš Bilgä Tängri Ilig という名称の西ウイグル国王の存在が初めて知られたことはとても重要である。

15) äpisqopa # < Syr. *’pysqwp’ (episqōpā)*, Sogd. *’pysqwp’* “Bishop, i.e. title of a high-ranking ecclesiastic in the Church of the East (the “Nestorian” Church)”［cf. UW 3, pp. 168–169; Zieme 2015b, p. 94, l. 22 & p. 95, fn. 371; Sims-Williams 2016, A *Dictionary*, p. 30］. We can find the same word in a bilingual epitaph in Syro-Turkic and Chinese dating from 1313 (*episqopa* in Syriac script; Chin. *abisiguba / hebisihuba*), and I think that *äpisqopa / apisqopa* could be used both as an ecclesiastical title and as a personal name in China under the Mongol rule［森安 2010, pp. 11–16; Moriyasu 2011, “Manichaean Paintings in Japan,” pp. 351, 354–355］.

17) tun kör # “Look at tranquillity!” On *tun*, see al-Kāšγarī［ED, p. 513a; CTD, II, p. 218］. この手紙文が 17 行目で完結しているならば、ここが締めくくりの文句のはずであるので、このように解釈する。しかし、もし文章がここで終わらずにもっと続いていたとするならば、*tun kör* ではなく *tün kün* “night and day” と読むことも可能である。

このブライク出土のウイグル語の手紙を書式や内容から分析すると、どうなるであろうか。まずその書体は、今では広く受け入れられている私のウイグル文字書体分類法[110]による半楷書体だから、その時代は10〜11世紀に限定され、また冒頭書式がA式[111]だから丁寧な上行文書であることも確実である。そして差出人がキリスト教の聖職者であり、しかも文中に西ウイグル王国の国王にふさわしい Yigädmiš Bilgä Tängri Ilig「イゲドミシュなる賢き天王」という名称と、王子殿下（*tigin tängrim qutï*）という称号まで見えており、冒頭で欠損している受取人は疑問の余地なく「／／／／／王子殿下（*tigin tängrim qutï*）」と復元できる。

ツィーメ教授の教示によれば、反対面にこの手紙のウイグル文字とは九〇度ずれる方向で紙面いっぱいに書かれたシリア文字テキストは、ウイグル語のキリスト教テキストであり、上・下・左・右端とも完存している[112]。ウイグル文字の手紙の方は上・下端と冒頭（首部）は確実に残っており、末尾も完存している可能性があるので、表裏の関係を即座に判定するのは難しい。しかしながらこの手紙は丁寧な手紙に使われるA式であり、拙著 *Corpus* に収録されたA式の手紙の実物はほとんどが新品の紙を使って書かれている事実を踏まえ、且つこの手紙の受取人が王族であることも考慮すれば、手紙の方を表面（おもて）と判断するのが妥当であろう。本文書には短冊状の折り跡がついている点から見ても、これが実際に送信された本物の手紙であることを疑う必要はない[113]。

ブライクから出土したのは、ウイグルの王子が受け取った後、何らかの事情で反故紙として宮廷の外に持ち出され、それをブライクのキリスト教団が受け取って、空白だった紙背を利用してシリア文字テ

キストが書かれたからであろう。拙著 *Corpus* に収録された手紙の実物には、宛先が発見地とはまったく違う場所、場合によっては発見地から遠く離れた宛先のものがいくつもあり、どうしてその手紙が発見地にもたらされたのか簡単に説明のつかないものが少なからず存在する。おそらくその理由としては、紙が貴重だった時代に空白の紙背を再利用するために反故として持ち出されたか、手紙を受け取った人が何らかの事情でそれを発見地まで持参したなどが考えられる。

さて文脈から判断して最も重要と思われるキーワードは6行目に見える *il yunglaqï* であり、それは「共同体用、国家の御用」と解釈できる。手紙全体の主旨は、差出人であるコシュ＝カヴアスナという名のキリスト教僧が、西ウイグル王国の支配者層に対して、キリスト教の聖餐式をするために必要な道具一式、具体的には葡萄酒を注ぐための聖餐杯、パンをつかむためのトング付きの聖体皿、聖餐式の始まるまでそれらを覆っておくための聖容器覆いなどに加えて、聖餐式に必須の葡萄酒1甕も取り揃え、それらを贈呈もしくは納入したので、それを国家のために使っていただきます、と述べているように思われる。ただし贈呈すなわち寄進とみるか、注文品の納入とみるかで、解釈は大きく変わってくる。

私が初めてこの手紙を解読した時は、これは宮廷附属のキリスト教会の祭壇にあった道具一式が古くなったので、新しいものと交換するようにプレゼントしたものと思っていたが、次節で取り上げる1007年のケレイトの改宗伝説の記事に、「二人の人物、すなわち司祭と助祭に祭壇用の道具一式を携帯させて派遣し、それらの帰依者すべてに洗礼を施し、キリスト教徒の慣例を教えよ」とあるのを知って、もしかしたらこれは、西ウイグル王国内にも徐々にキリスト教信者が増えていく中、宮廷内に初めてキリスト教会を設置する必要が生じた時に出された歴史的な手紙ではないかとさえ考えるようになっている。もしそうであれば、コシュ＝カヴアスナというキリスト教僧が、恐らくはシルクロード貿易によって苦心して買い集めた聖餐式用の物品一式を、西ウイグル国家に寄進し、国家公認のキリスト教会で使用されることを願ったものであろう。つまりこの手紙は、ウイグルのキリスト教団が王室に積極的にアプローチし始めた様子を伝えていることになる。その場合は、この手紙は10世紀でも王延徳訪問の980年代以前のものとみなすのが妥当であろう。なぜなら森安 1991＝Moriyasu 2004 で明らかにしたように、西ウイグル王国で国教的扱いを受けた宗教は、10世紀後半まではマニ教であり、それ以後は徐々に仏教に取って代わられていくが、王延徳の旅行記からもうかがえるように、980年代にはキリスト教もそれなりの国家的保護を受けてマニ教や仏教と併存していたからである。

しかしそうではなくて、この手紙の差出人であるキリスト教僧侶が商人であり、この手紙は商品の納入に関わるものであると仮定したら、事情は変わってくる。たとえば宮廷附属のキリスト教会の祭壇にある道具一式を新しいものと交換するために、ウイグル王族がキリスト教徒の商人に発注し、その納入後に商人が何らかの確認、もしかしたら代金の催促などのために出した手紙とも考えられる。その場合は、この手紙はやや年代幅を広くとって10～11世紀に編年されることになる。

第7節　トルコ族のキリスト教改宗伝説（その3）

13世紀後半にバル＝ヘブラエウス Bar Hebraeus[114]（生没1226～1286）がシリア語で書いた『シリア編年史』*Syriac Chronicle*（1286）、並びに『教会編年史』*Ecclesiastical Chronicle*（1286）によれば[115]、メルヴの大司教アブディーショー ʻAbd-īšō からバグダードにいるカトリコス（総大司教）ヨハネ六世への報告として、東方にいるトルコ族であるケレイト族の20万人が、1007年[116]、その君長の身に起きた奇跡によってキリスト教に改宗し、洗礼を受けようとしたことを伝えている。

1007年という紀年は『シリア編年史』の方にしか記されていないが、奇跡の内容が子細に語られるのは『教会編年史』の1001年から1012年の記事であるので、以下にまずそれを引用する[117]。

その時、ホラサーン地方の一都市であるメルヴの大司教アブディーショーはカトリコスに書状を送って（次の様に）報告した。

東北地方にある彼ら固有の土地に住んでいるトルコ族で、ケレイトと呼ばれる部族の君長が、領域内のある高い山で狩猟をしていた時、猛烈な吹雪に襲われ、原野の中で道と方角を失った。もは

や生きて抜け出す希望を捨てた時、幻に一人の聖者が現れて、「もし汝がキリストを信じるならば、汝がここで死なないように私が道案内してやろう」と言った。そこで君長がキリスト教団の子羊となると誓約したところ、聖者は君長を導き、安全な所に連れ出してくれた。無事にキャンプ地に帰り着いた君長は、キャンプ地のあたりを往来しているキリスト教徒の商人を召し出し、キリスト教の教理について質問した。すると商人たちは、キリスト教を信仰するには、洗礼を受けねば完全ではないと答えた。そこで君長は商人たちより福音書をもらって、日々これを崇拝した。

今、（ケレイト）君長は私（すなわちメルヴの大司教アブディーショー）に使者を送ってきて、私自身が彼のもとに赴くか、誰か一人の宣教師を派遣して彼に洗礼を施すことを求めている。また彼は断食日に関して、「自分たちには動物の肉と家畜の乳のほかには食すべきものがない。どのようにして断食したらよいか」と私に尋ね、さらに自分と共にキリスト教に改宗した部衆は20万人に達していると述べた。

（以上のような報告をアブディーショー大司教から受けた）カトリコスは大司教に次の様に書き送った。「二人の人物、すなわち司祭と助祭に祭壇用の道具一式を携帯させて派遣し、それらの帰依者すべてに洗礼を施し、キリスト教徒の慣例を教えよ。四旬節の断食に際して、信者は肉食を絶つべきである。彼らが言うように、彼らの国では四旬節に許された食物が見つからないのであれば、家畜の乳だけは飲んでも良い」と。

実はこの伝承とほぼ同じ内容のものが、アラビア語キリスト教文献『塔の書』*Kitāb al-Mijdal (The Book of the Tower)*[118]の11世紀にまで遡る部分にも、見出されるのである。やはりメルヴの大司教アブディーショーからバグダードにいるカトリコスに送られた年月日不明（とはいえ1001年から1012年の間）の手紙に関する記述からの引用である。[119]

トルコ族のある君長が、配下の（部族民）20万人と共にキリスト教徒となった。その理由は、その君長がある日狩猟に出かけていって道を見失い進退に窮したが、一人の人物に出会い、彼が君長を困難な状況から解放しようと申し出てくれた。彼の名前を尋ねると、「私は聖セルギスである」と答えて、君長にキリスト教徒になるよう指示した。そして君長はその人物から「両目を閉じよ」と言われたので、その通りにして、それから両目を開けると、もとのキャンプ地に帰り着いている自分を発見した。この奇跡に驚いた君長は、キリスト教と祈禱と律法書について調べさせて、「主の祈り」「主よ、あなたに」「聖なる神よ」という三つの祈禱を学び取った。

（メルヴの）大司教が語るところによれば、その君長は大司教が彼の所にやって来るように（願い）、且つ彼らの日常の食物は動物の肉と家畜の乳であると書き送ってきた。その君長は、十字架と福音書を置いた祭壇を設置するためにテントを建て、それを聖セルギス教会と名付けた。彼は牝馬を繋いで乳を搾り、それを福音書と十字架の前に供えた。そして彼の学び知った祈りの言葉を述べ、十字を切り、馬乳を一飲みすると、他の部族民の会衆も同じようにした。

大司教はカトリコスに、彼ら（トルコ族）の所には（パンを作る）小麦がないので、その君長と部族民が（典礼で）やっていることに対する許可を請うた。それに対してカトリコスは大司教に、復活祭の饗宴のために足りるだけの小麦と葡萄酒を供給するよう努力せよと命じた。さらに、彼らは断食中には肉食を絶ち、家畜の乳だけで満足すべきこと、そしてもし彼らがいつもは酸乳（発酵させた馬乳酒（クミス）を指す）を消費しているなら、彼らの習慣を変えて甘いミルク（未発酵乳）を使うようにさせよと命じた。

このように『塔の書』と後世のバル＝ヘブラエウスが伝える改宗伝説は大筋では合致しているものの、細部ではかなり異なっている。そのことは、バル＝ヘブラエウスの情報源が『塔の書』ではなく、メルヴの大司教アブディーショーの手紙にまで直接遡ることを推測させもするが、バル＝ヘブラエウスによる意図的な改竄・増広の可能性もおおいに疑われる。[120]両者の改宗伝説で最も大きな相違点は、キリスト教に改宗した集団を、成立の古い『塔の書』が単にトルコ族だったとするのに対し、後世のバル＝ヘブラエウスがケレイト族と特定している点である。

このケレイト族とは、チンギス汗勃興以前の12

地図２

世紀にモンゴル高原でもっとも大きな勢力を持っており、キリスト教を信仰していたことでもよく知られた部族集団である。しかしケレイトという部族名が史上に明確に現れてくるのは、12世紀も後半になってからである。それゆえ実際に1007年にキリスト教に改宗したトルコ族をケレイトに限定する必要はなくなり、他の可能性も浮上する。学界では、文字通りモンゴル中央部のケレイトとみなす説がある一方、漠南（内モンゴル）にいたオングートであるとするアトウッドや馬暁林のような見方［Atwood 2014; 馬暁林 2018a, b］も現れてきている。[121] なぜならケレイトはトルコ族ではなくむしろモンゴル族とみなすべきであるのに対し、オングートは今ではトルコ族であることが確定しているからである（次節参照）。また『塔の書』の伝承に見える聖セルギスと同じ人名が、オングートにはいくつも確認できるのに、ケレイトには一度も見つかっていない。[122] その上、オングートには、その主邑オロンスムにキリスト教会の遺跡やキリスト教徒の墓誌銘が厳然として存在する。[123]

それでは本当にオングート説の方が正しいのであろうか。以下の２節では、それぞれオングートとケレイトについて考察してみよう。

第８節　オングート

漢文史料では汪古・汪古惕・雍古多・王孤などと表記されるオングートは白韃靼（達達）とも呼ばれたため、古くは韃靼すなわちモンゴル族の分派とみなす説があったが、それは早くに完全否定された。また被支配者層がモンゴル系で支配者層がトルコ系とみなす説や、いささか驚くべきチベット系説さえあったが、いずれももはや過去のものである。王族や有力貴族の碑文や家譜を含む漢文史料に拠るかぎり、最有力であったトルコ系説は、その後、オングートのキリスト教遺跡と判明したオロンスム及びその周辺から出土した墓誌銘がすべてトルコ語であった事実から、鉄案となった。[124] ただ同じトルコ系でも沙陀突厥の後裔とする説と、ウイグルの後裔説と、両者の混在説の三者が入り乱れている。[125]

金朝時代には北辺の国境線に設けられた「界壕」を守備する役割を与えられていたオングート集団が、[126] 金朝を見限って勃興途上のモンゴル部のチンギス汗に服属するようになったのは、アラクシュ＝テギン＝クリが君長の時であった。彼に関して、闊復（撰）「駙馬高唐忠献王碑」に見える「謹按家傳、系出沙陀雁門節度之後、始祖卜國、汪古部人」や『元史』巻 118・阿剌兀思剔吉忽里伝の「汪古部人、系出沙陀雁門之後、遠祖卜國」という記事の後半を重視し、さらに後で紹介するアラクシュとは別系統のオングートの有力一族である馬氏の「恒州刺史馬君神道碑」に「出于花門貴種」とあるのを見れば、ウイグル後裔説が有力となる。なぜなら有名なウイグルの始祖説話であるブクハン伝説の主人公の名前は決して前舌系の Bögü ボゥギュではなく、後舌系の Boquγ ボクグであり、卜国（ぼっこく）はそのボクグと音韻的に見事に対応するだけでなく、[127] 花門は唐代ではウイグルの代名詞だったからである。さらに13世紀後半にラッバン＝サウマーと共に中国から西アジアまで旅して、後には東方シリア教会のカトリコス（総大司教）ヤバラーハー三世となるオングート出身のマルコスのことを、同時代人のバル＝ヘブラエウスはウイグルだとしている。[128] つまりオングートとウイグルはそれほど混同されやすかったのである。[129]

とはいえ、それで沙陀説が完全に論破されたわけではない。山西省の代県／代州には至正十五（1355）年建立の「柏林寺晋王影堂碑」[130] というオングート王家と沙陀・朱邪氏の李克用とを結びつける史料があるだけでなく、９世紀のいわゆる「沙陀三部落」に代表されるように沙陀とソグド人が密接に交わっていた状況があり、[131] そこにソグド人の影響を受けたキリスト教徒のいた可能性も低くないからである。[132]

そもそもオングートも白韃靼も他称であり、自称は知られておらず、さまざまな部族が寄せ集まって

できあがってきた雑種集団とみなされている。その漠南という居住地からみても、そこに９～10世紀に目覚ましい活躍を見せた沙陀突厥の後裔も、840年代の南走ウイグルの後裔も混じっており、さらに新たに西ウイグル王国からやってきた集団が加わった可能性も十分ありえる。このような見方はすでに諸先学から出されたものであるが[133]、あるいは実態はその逆で、西ウイグル王国からやって来たネストル教を信奉する集団が中核となり、そこにかつての南走ウイグルや沙陀突厥の後裔が加わったのかも知れない。

王族たるアラクシュ＝テギン＝クリの家系とは別に、後にオングート部を構成することになる有力な二つの家系のルーツが、10～11世紀の遼宋時代にまで遡ることが分かっている。一つは、かつて浄州と呼ばれたオングートの本拠地（現内蒙古自治区烏蘭察布市四子王旗）より1930年前後に出土した「管領諸路也烈□□答耶律公神道之碑」より判明するのであるが、元代に也里可温（本碑では也烈□□と表記）すなわち景教徒を率いた本碑の主人公・耶律子成の先祖は、その姓名から推測されるような純粋の契丹人ではなく、聖宗時代（在位 982-1031年）に遼にやって来た「西域帖里薛人」で、ある功績によって契丹の王族と同じ「曳剌（＝耶律）」の姓を賜ったという[134]。「帖里薛」は唐代の大秦景教流行中国碑の「達娑」、モンゴル時代の漢文史料に現れる「迭屑」と同じく、明らかにキリスト教徒を指す。「達娑」「迭屑」は中世ペルシア語の tarsāg ないしそこから借用されたソグド語 trs’q / trs’k の音写であり、「帖里薛」はそこから派生した近世ペルシア語のタルサー tarsā の音写であろう[135]。つまり、後のオングートを構成するこの一族の先祖は、10世紀の末から11世紀の初め頃に西域からやって来たキリスト教徒であったわけで、西ウイグル国出身のソグド系ウイグル人であった可能性が高いが[136]、あるいはセミレチエからやってきたものかもしれない。

もう一つは、有名なオングート馬氏の家系であり、その情報源は①元好問（撰）「恒州刺史馬君神道碑」（『遺山先生文集』巻 27）と②「馬氏世譜」[137]（黄溍『金華黄先生文集』巻 43）と③『金史』巻 124・馬慶祥伝である。②より約100年古くて信頼性の高い①を基礎にして①と②の情報を合わせれば、その始祖は、北宋の政和～宣和年間（1111～1125年）に北宋治下の臨洮の狄道（黄河が北流を始める起点より長安寄りの土地）にやってきて牧畜に従事し、二代目の帖穆爾越歌／迭木兒越哥（テムル＝オゲ Tämür Ögä）の時には北宋から指揮使に任じられるまでになった[138]。しかるに三代目の伯索麻也里束／把騒馬也里黜（推定で Bar Sauma Elišo）の若い時に北宋が金朝に滅ぼされると一家は恐らく隷属民として遼東に遷されたが、そこである宗教的奇跡が起こり[139]、それを契機として漠南の静州（＝浄州）の天山県に移り、そこで牧畜に従事し、富み栄えたという。「恒州刺史馬君神道碑」の直接の対象は馬慶祥であり、彼は伯索麻也里束の子であり、金朝に仕えておおいに出世した。六カ国語を解し、勃興期のモンゴルにも使いしたという。その神道碑によると、馬慶祥の本名を習里吉思、先世の出身を「出于花門貴種」とし、おそらく父の時代に上記の宗教的奇跡の舞台となった寺院を「回鶻人梵唄之所」としている。花門は唐代からのウイグルの代名詞であり、習里吉思はセルギスで典型的なクリスチャン名である。成立の遅い「馬氏世譜」と比較すれば、神道碑の「出于花門貴種」は明らかに「馬氏世譜」の「西域聶思脱里（ネストル）貴族」[140]と対応しており、年代も考慮すれば、この馬氏一族が、西ウイグル王国からやって来たネストリウス派キリスト教徒であった可能性は極めて高くなる。

また、「恒州刺史馬君神道碑」によれば、馬慶祥（＝習里吉思）の妹は安氏に嫁いでいるが、殷小平はその安氏をウイグル人とみなし、その安氏出身で金朝の訳史として活躍した安天合の天合をデンハ Denha というクリスチャン名の音写とする。つまり安天合はウイグル人景教徒であったと推定するのである[141]。さらに馬曉林は、宋子貞（撰）「中書令耶律公神道碑」に安天合なる人物が「回鶻譯史」と称されている事実を指摘している[142]。安姓は私のいわゆるソグド系ウイグル人の典型であるから[143]、私は両氏の推論に賛成する。

10～12世紀に西ウイグル王国から中国側の遼朝・宋朝・金朝にやってきた者たちは、マニ教徒であれ仏教徒であれキリスト教徒であれほとんどが商業目的であったと考えられているから、上記のオングートを構成した耶律氏や馬氏の始祖もやはり商人であったとみなしてよかろう。

ところで私はブクハン伝説の主人公のモデルを東ウイグル帝国の新王朝とも言うべきエディズ朝の創設者である懐信可汗（在位 795-808年）とみなしている。とはいえ伝説の成立は西ウイグル王国時代に

なった10世紀前後と考えているので、[144] 840年の東ウイグル帝国崩壊直後に集団移動した南走ウイグルがその伝説をもっていたはずはない。それゆえモンゴル時代のオングート集団が「始祖卜國」とするブクハン伝説を持っているのは、オングートの中核となった集団が西ウイグル王国の出身であるか、あるいは西ウイグル王国と緊密な通交関係をもっていて、それを取り込んだからであろう。[145]

地図３

第９節　ケレイト

ケレイトという遊牧部族の名が史上に現れてくるのは12世紀後半からである。ラシード＝アッディーンの『集史』ではケレイトと呼ばれ、漢文史料では怯烈・怯烈亦・克烈・客烈亦惕などと書かれる。ケレイト族はチンギス汗に率いられたモンゴル帝国勃興以前のモンゴル高原において最有力だった騎馬遊牧民集団であり、その居住地はモンゴル高原中央部のオルホン河〜トーラ河〜ケルレン河流域であった。

東ウイグル帝国時代までは大部分がトルコ族の世界であったモンゴル高原が、徐々にモンゴル族の世界へと変化していき、13世紀初頭のチンギス汗によるモンゴル帝国出現によって名実ともにモンゴル世界となるまでの数世紀間に次から次へと起きた民族移動と民族混交の歴史は、史料不足のため未だによく分かっていない。それでもこのいわばモンゴル帝国前史の解明に尽力した先学たちによって、『遼史』の阻卜、『金史』の阻鞨が五代・宋側史料に見える韃靼／達靼／塔坦と対応し、韃靼／達靼／塔坦がタル Tatar の音写であり、それがモンゴル系の人々を中心とする集団であることが解明された。[146] 次いで前田直典の画期的論文［前田 1948］があり、それを受け継いだ村上正二・陳得芝・白玉冬らによって、８世紀に東ウイグル帝国の北方（セレンゲ河中下流域およびその東方）に分布していたトクズ＝タタル Toquz Tatar「九姓タタル」が840年の東ウイグル帝国瓦解後に南下し始め、10〜11世紀には漠北のモンゴル中央部のオルホン河〜トーラ河流域に「九族達靼」とか「達旦国九部」と呼ばれる王国を形成し、[147] メルキト・ナイマンなども含む阻卜という連合王国の中心勢力となったことが明らかにされた。[148] ナイマンはトルコ系であるとする説が有力であるから阻卜全体を単純にモンゴル系とは言えないが、[149] 阻卜の中核部族であった九族達靼はモンゴル系であり、これが12世紀後半に現れるケレイトの前身なのである。[150] つまり九族達靼＝ケレイトはモンゴル系であったとみなしてよいが、五代・宋側史料に見える広義の韃靼／達靼／塔坦（タタル）には、同じモンゴル系でもケレイト部やメルキト部やテムジン率いる狭義のモンゴル部のみならず、ケレイト部およびモンゴル部と敵対し血で血を洗う戦いを繰り広げた狭義のタタル部が含まれることに注意されたい。つまりタタルには広義と狭義があるのである。[151]

別の説明をすれば、８世紀の突厥碑文とウイグルのテス碑文に現れる Otuz Tatar「三十姓タタル」[152] は後世のケレイト部・メルキト部・タタル部・モンゴル部などを含む広義のタタルであり、同じく８世紀の突厥碑文とウイグルのシネウス・タリアト両碑文に現れる Toquz Tatar「九姓タタル」は後世のケレイト部に相当する狭義のタタルすなわち九族達靼なのである。私は九姓タタルが三十姓タタルに含まれていたとする白玉冬説に賛同するが、[153] たとえ含まれていなかったとしても、両者の居住地域はモンゴル高原中央部を東方と北方から包み込むように、大興安嶺周辺からシルカ河流域を越えてバイカル湖周辺にまで連続していたと考える。そのモンゴル系を中心とする大集団全体を、８世紀までの唐側では「室韋」と総称していた。唐側史料に「韃靼」という名称が現れるのは９世紀中葉頃からである。[154] 私は白鳥庫吉と同様、「室韋」も「韃靼」も後世のモンゴル系諸集団を包摂する名称であると考えている。[155] ただし室韋にはツングース族も含まれていた可能性が高いが、韃靼にはその可能性はない。

ケレイトをトルコ系とみるかモンゴル系とみるかについて学界では長らく意見の対立があったが、上述のように今ではケレイトの構成民については大部分がモンゴル系であったとみなしてよい。しかし、一部にトルコ系も混じっていた点までは否定できず（後註 161 に対応する本文参照）、さらに支配層は先進文明、具体的には西ウイグル王国の文化的影響を受け、12世紀までにある程度はトルコ化・トルコ語化していたようである。[156] 彼らの支配層で史上に残る人名の多くはトルコ語なのである。またそれゆえにこそ、かつてはケレイトをトルコ化したモンゴル族であるとかモンゴル化したトルコ族とみなす説が根強くあったのである。[157]

ケレイトでもっとも有名な君長は、テムジン（後のチンギス汗）の父イェスゲイの助力を得てハン位に就き、金朝から「王」（中古音 *ɦuaŋ；中原音 *iuaŋ*）の称号をもらったためオンハン／ワンハンと呼ばれたトグリルである。テムジンは父イェスゲイが遊牧部族間の争いの中、タタル部人の手にかかって殺された後、放浪生活を送り、復活後はこのオンハンに臣従し尽力していたが、彼に何度も裏切られ、ついには袂を分かつことになる。チンギス汗が最終的にケレイト王国を打倒することによって、モンゴル王国が生まれ、さらにそこからモンゴル帝国へと大発展していくのである。

諸先学の研究成果として、ケレイト王国のオンハンの祖父としてラシード＝アッディーン『集史』に見えるマルグズ Marγuz とは、『遼史』が 1089 年に阻卜諸部長になったと伝え、その後 12 世紀初頭まで何度も現れる磨古斯（まこし、mo-gu-si、**muâ-kuo-sie̦*）と同一人物であり、その名前はクリスチャン名マルコス（ギリシア語 Markos、ラテン語 Marcus、シリア語 Marqōs、トルコ語 Markuz、日本語マルコ）に対応すること、さらにそのマルコスの子でオンハンの父となる人物は『集史』によればクルジャクス Qurǰaqus で、これまたクリスチャン名キュリアコス（ギリシア語 Kyriakos、ラテン語 Cyriacus、シリア語 Quryaqōs、トルコ語 Quryaquz / Qīryaquz / Kiryakuz）に対応することが明らかにされている。[158] 当然ながらこの比定から、ケレイトと阻卜が同じ騎馬遊牧民集団を指すことが導かれる。[159] さらに『遼史』によれば、磨古斯登場以前の 1081 年と 1086 年の二度にわたり遼に朝貢したとされる阻卜酋長・余古赧（よこねん、yu-gu-nan、**i̯wo-kuo-nan*）の名前も、明らかにクリスチャン名ヨハネのシリア語 Yōḥannān ないしトルコ語 Yoxnan に対応する。[160] これら三人の阻卜＝ケレイト部長の名前に象徴されるように、ケレイト部はネストリウス派キリスト教徒であったことで有名である。

ケレイトはモンゴル系であるとはいえ、王延徳が宋朝の公使として九族達靼の地を経て西ウイグル王国に行き、帰国した直後の987年には、宋朝に「合羅川回鶻（ウイグル）第四族首領」が朝貢している。前田直典が言うように、[161] このウイグルは東ウイグル帝国潰散後もオルホン河流域に残存していた集団であろうから、まさに九族韃靼＝阻卜連合王国の内部にいたのである。つまり1007年の時点でモンゴル高原中央部にいた遊牧民集団をトルコ系かモンゴル系かに截然と区別することは第三者にとっては困難であった。いや、困難と言うより、むしろ不可能であったと言うべきであろう。その理由は二つあげられる。

第一に、そもそも11世紀にはまだモンゴルというのは小さな部族集団のみの名称であって、モンゴル帝国成立以後のように、ケレイトやタタルやメルキトなどを含むモンゴル系諸部族の総称ではなかった。それゆえケレイトがたとえモンゴル語のみを話す純粋のモンゴル系集団であったとしても、それをモンゴル族の一派と呼ぶことはできなかったはずである。

第二に、例えば11世紀のイスラム世界を代表する二人の大学者、すなわちガズナ朝に仕えたビールーニーとカラハン朝出身のカーシュガリーでさえ、モンゴル系の契丹だけでなく全く別系統のチベット人もタングート人もトルコ族と見なしているように、当時のイスラム世界の側からすれば、カスピ海以東の中央ユーラシアの遊牧民はすべて「総称としてのトルコ族」に含める以外の分類法はなかったのである。それはなにもこの二人に限ったことではなく、イスラム勃興以後のアラブ・ペルシア語史料ではほとんど例外なく、中央ユーラシア草原地帯に展開する遊牧民はひとしなみにトルコ族とみなされる傾向にあった。[162]

ただ13世紀前半におけるモンゴル軍団の西方大遠征後になると、イスラム世界でもモンゴルの実態をつかめるようになった結果、さすがに状況に変化が現われてくる。宇野伸浩によれば、1260年に完成したジュワイニー『世界征服者の歴史』や1330年に編纂されたムスタウフィー『選史』では「トルコ」と「モ

ンゴル」をはっきり区別しているが、ジューズジャーニー『ナースィル史話』やラシード＝アッディーン『集史』では、両者を区別する場合と、「モンゴル」を「トルコ」に含める旧来の分類法が混在しているという。[163] 実はバル＝ヘブラエウス自身もトルコ族とフン族とモンゴル族を同一視していた。[164] それゆえ、1007年にキリスト教に改宗したのはトルコ族なのだからケレイトではなくオングートであるとする主張ないし反論には、全く学問的根拠はないのである。

『塔の書』では単にある東方の「トルコ族」のキリスト教改宗説話だったものを、バル＝ヘブラエウスが「ケレイト族に特定」してしまった背景としてダンロップやハンターが考えたのは、モンゴル帝国に包摂された多民族の中でもケレイトがキリスト教を信奉する集団として際立っており、しかも以下に述べるように旧ケレイトの王族がチンギス汗の黄金氏族と密接な婚姻関係を維持していた事実である。[165]

チンギス汗の黄金氏族とケレイト出身のネストル教徒の配偶者との結び付きは、チンギス汗の時代から始まっている。彼自身がかつて臣属し、後に滅ぼしたケレイト王オンハンの弟ジャアガンボに４人の王女がいた。すなわちオンハンの４人の姪であるが、そのうち名の知られているのは３人である。その１人をチンギス自身が娶り、すぐ離婚したが、残りの２人はチンギスの長子であるジョチと末子のトルイに嫁いで長く影響力を維持した。特にトルイに嫁いで正后となったソルコクタニ＝ベキは、モンケ・クビライ・フレグ・アリクブケを生んだのであり、後にモンケとクビライはモンゴル皇帝に、フレグはイル汗国の君主になったので、その権力は絶大であった。彼女自身はもちろんキリスト教徒であったが、イスラム教徒にも手厚い保護を加えた。さらにトルイには、やはりケレイト出身の側室であるドクズ＝ハトン（実はオンハンの孫）がいたが、トルイの死後、フレグに再嫁した。[166]

イル汗国（フレグ＝ウルス）においてもケレイトは黄金史族の姻族としての地位を保ち、[167] ネストル教徒の王妃たちの影響力は維持された。イル汗国の創始者であるフレグとその正后となったドクズ＝ハトンは、キリスト教の強力な擁護者であり、フレグはバグダードを開城させた時、カトリコスの座所であるその都市の管理をキリスト教徒に委ねたという。[168] そしてドクズ＝ハトンはフレグの領土内で常にキリスト教徒を保護した。[169] 次いでフレグの子のアバカは、ドクズ＝ハトンの姪で父フレグの側室であったトクタニ＝ハトンを正妃とし、アバカの子のアルグンの后となったウルク＝ハトンはドクズ＝ハトンのもう一人の姪であった。[170] アバカ・アルグン両者とも妻の影響が強くあってキリスト教を保護した。こうした彼女らの庇護のもと、イル汗国ではネストリウス派やヤコブ派のキリスト教が繁栄したのである。[171] イル汗国が君臣挙げてイスラム教国になってしまうのは、アルグンの子であるガザンとオルジェイトゥの時代以降のことである。

バル＝ヘブラエウスが生きた時代のイル汗国はイスラム世界のまっただ中にできた非イスラム政権だったのであり、そこで活動したバル＝ヘブラエウスはネストリウス派ではなくヤコブ派の高僧であったが、西方のカトリックとはちがう同じ東方のシリア教会のキリスト教を信奉するケレイト族に強いシンパシーを抱いていており、ソルコクタニを称賛していた。[172]

周知のように、王族がチンギス汗の黄金氏族と密接な婚姻関係を維持していたという点では、実はオングートもケレイトに劣らない。[173] しかしながら、1007年にキリスト教に改宗した東方のトルコ族は20万と伝えられている。もちろんその数字に誇張があるにしても、その時点ではオングートはまだ漠南の部族集団としてのまとまりさえ不完全であったことは前節で見たとおりであり、集団名もなく人口も決して多かったとは思われない。それに対してケレイトは、早くも10～11世紀に阻卜とか九族達靼として知られており、オルホン河～トーラ河～ケルレン河流域を中心とする漠北一帯を掌握し、白玉冬の研究によれば、一時は遊牧国家を形成したとさえ考えられる大集団なのである。[174] 1007年にキリスト教に改宗したトルコ族の候補としては、オングートよりケレイトの方が遥かにふさわしいのである。[175]

すなわち、バル＝ヘブラエウスが1007年にキリスト教に改宗したトルコ族をケレイトと特定したのは、たとえそれが恣意的な改竄であったにせよ、結果的には正しかったということである。

第10節　阻卜・ケレイト族のキリスト教改宗と西ウイグル王国

ではなぜ阻卜すなわちケレイト族はキリスト教に

改宗したのだろうか。第２・３節で検討したカルルクの場合は、第一に政治的理由が挙げられたが、ケレイトの場合はむしろ商業的理由が大きかったようである。

これについて例えばハンターは、先のバル＝ヘブラエウスの『教会編年史』の記事を持ち出し、商人の活動と宗教伝道活動との緊密な関係に注目する。[176] 宗教伝道に商人が密接に絡むことは古今東西に見られる現象であり、こういう見方はもはや常識であるとさえ言えるが、岡田英弘はハンター論文より15年も前に出た概説書の中で、一切論証なしで次のように断じている：「中央アジアから来訪した商人の感化でネストリウス派キリスト教に帰依したケレイト王は、1007年ごろメルヴの大司教に使を遣わして司祭の派遣を求めたという」。[177] ではその中央アジアから来訪した商人とは何者か。これはもう言うまでもなく西ウイグル王国でネストリウス派キリスト教を護持していたウイグル商人、さらに踏み込んで言うならばソグド系ウイグル商人 、すなわちウイグルへやって来たソグド人の子孫でソグド語もウイグル語もできたネストル教徒の商人たちである。

11世紀初頭という時点で阻卜＝九姓タタル（＝ケレイト）の領域に、西ウイグル王国からキリスト教徒の商人がやってきており、例の伝説のようにキリスト教に改宗する環境が整っていた点については、敦煌出土のソグド＝ウイグル語文書[179]も活用した白玉冬と付馬によって既にじゅうぶん論じられている。[180] そのことは見方を変えれば、西ウイグル王国のキリスト教徒が布教と商業目的でモンゴル系諸集団の中ではすぐ近くにいた阻卜＝九姓タタル（＝ケレイト）に働きかけ、結果的にウイグル文字文化を浸透させたことを示唆する。２世紀後のモンゴル帝国初期において文書行政を取り仕切るビチクチ／ビチェーチの最上位者にウイグル出身者とケレイト出身者が目立っているのは、[181] その必然的現象と考えられる。それゆえ長田夏樹がウラジミルツォフやポッペの説を敷衍して、ウイグル文字モンゴル文語そのものがケレイトから受け継いだものとする見解［長田 1952］も、正鵠を射ているように思われるのである。

これまで私には、ソグド人の人口はさほど多くないのに、ゾロアスター教徒もマニ教徒もキリスト教徒も仏教徒もいて、そのいずれもが歴史上かなり大きな影響力を持っていたのがどうにも不思議で仕方がなかった。しかし今思うに、ソグド人たちは、宗教は儲かるとして、宗教を商業網拡大のために利用したのではないだろうか。固有の宗教としてはイラン系民族特有で異民族に布教しないゾロアスター教を持っているため、その他の宗教については比較的寛容であり、第二の宗教としては、商業取引の相手に合わせて仏教・キリスト教・マニ教・イスラム教など伝道・布教活動をする普遍宗教を選び取ったと考えてはどうだろうか。すなわち東ウイグル帝国にはマニ教を導入し、唐帝国ではマニ教と仏教を信奉し、イスラム帝国特にアッバース朝ではイスラム教を活用し、カルルクに対してはキリスト教（景教）を利用した。そうであれば、人口の少ないソグド人の間で、さまざまな宗教が信仰されていたとする不自然さが解消できよう。

11世紀を境にソグド商人は史上から姿を消すが、モンゴル時代に活躍する回回商人は私に言わせれば旧ソグディアナでトルコ族と混血したソグド商人の後継者であり、ウイグル商人は旧西ウイグル王国のソグド系ウイグル商人の後継者であり、いずれもモンゴル王族と結び付いたオルトク商人[182]として活躍するのである。10世紀中葉にカラハン朝のトルコ族の20万帳がイスラム教に改宗したのは、ソグド本国がイスラム化したため、旧ソグド商人がイスラム教徒になっていたからであり、11世紀初頭にケレイト族の20万人がその君長に倣ってキリスト教に改宗したのは、キリスト教徒のソグド系ウイグル商人が背後にいたからと考えることは、あながち荒唐無稽ではなかろう。ウイグル商人が東アジアだけで活動するなら仏教徒になるだけで十分であるが、西アジアのイスラム圏にまで活動範囲を広げるためには、11世紀初頭には衰退しつつあるマニ教に代わって、イスラム圏でも認められているキリスト教を利用するのが得策だったのではないだろうか。なぜなら、先にも述べたように、イスラム教徒にとって偶像教徒である仏教徒とは敵対関係にあったが、キリスト教徒は同じ啓典の民とみなされていたからである。

ちなみに『塔の書』の14世紀に書き足された部分には、当時の東方シリア教会の「（中心区域）外の大司教」を列挙するリストがあるが、その関連部分は以下の通りである。[183]

第14位＝支那の大司教、第15位＝インドの大司教、・・・、第21位＝サマルカンドの大司教、第22位＝トルキスタンの大司教、・・・、第26位＝タングートの大司教、第27位＝カシュガル

と Nawīkath[184]の大司教

このうち第22位のトルキスタンの大司教を、８世紀末にテモテ一世によってカルルク族の間に任命された者の後裔と見なす考えも当然あろう[185]。しかし私はそれはむしろ「第27位＝カシュガルと Nawīkath の大司教」に相当すると考えるので、第22位のトルキスタンの大司教とはまさしく1007年にトルコ族（実はモンゴル系の達靼＝阻卜で、後のケレイト族）の集団改宗後に、内陸アジア東部のモンゴル族を含む広義のトルコ族のキリスト教徒をまとめるために派遣された大司教ではないかと推測する。漠南のオングート族は地理的に見て第26位のタングート（旧西夏国領）の大司教配下に入るに違いないから、漠北のケレイト族とナイマン族、及び東部天山地区の旧西ウイグル王国領のキリスト教徒を統括する役割を担ったものであって、もしかしたらその大司教座はブライクにあったのかもしれない。高昌にほど近いブライクの Šui-pang / Shipang は、その規模・景観や禁欲主義のテキストが多く出土する点などからみて修道院とみなされているが[186]、20世紀初頭にトゥルファンで現地調査したドイツ隊を率いたグリュンヴェーデルの報告によれば、クルトカからブライクまで遺跡は連続していたようであるから[187]、Šui-pang と Kurutka を含むブライク地区全体を大司教座とみなすことは不可能ではないように思われる。もちろん、冬の都・高昌の城内ではないが城外すぐ近くにもキリスト教寺院址が二箇所で発見されているから[188]、それも合わせて大司教座であったのかもしれない[189]。

モンゴル帝国勃興直前のモンゴル高原でキリスト教を信奉していた部族集団として有名なのはナイマン・ケレイト・オングートであるが、この三者はいずれも西ウイグル王国に隣接している。キリスト教の布教にはおそらく聖典などの文字言語が使われたであろう。ブライク出土のキリスト教文献のあり方を考慮すれば、ソグド語は除いてシリア語・ウイグル語の聖典を持ったキリスト教宣教師が西ウイグル王国から東北方～東方～東南方へ派遣された可能性がもっとも高い。

ただし、そうだとすると奇妙なのは、1007年にケレイトの君長がキリスト教について質問や請願をした相手が、西ウイグル王国にいる者ではなくて、はるか遠いメルヴの大司教だったことである。ケレイトはメルヴの大司教に連絡したのだから[190]、西ウイグル王国にはまだ大司教座はなかったに違いない。第６節で取り上げたウイグル語の手紙 COUL no. 04 ＝ U 3890 recto に現れていたのも大司教ではなく、１ランク下の司教（*äpisqopa*）であった。とすれば、西ウイグルの恐らくブライク地区に大司教座が置かれたのは、11世紀の初頭以降とみなすべきであろう。第６節で取り上げた手紙の書かれた時も、西ウイグルにはまだ大きなキリスト教会はなかったように思われる。980年代の王延徳の旅行記に仏教以外の宗教事情として「復有摩尼寺・波斯僧各持其法」（『宋史』p. 14112）とあるのは、波斯僧（キリスト教僧）はいてもまだ波斯寺はなかったのだと深読みすることが許されるかもしれない[191]。

付馬 2019, p. 194 では、ツィーメが発表した Kurutka 出土のシリア文字で書かれたウイグル語のキリスト教文書 U 330 + U 334 に、実に断片的ではあるが、「この福徳・善行・・・・・・恩寵と祝福において、東は・・・・・・タングート諸国から、西は波斯・・・・・・諸国から」と読み取れる点を、私がいわゆる第三棒杭文書を研究して得た結論、すなわち1019年時点の西ウイグル王国が東は沙州まで、西はウッチ・バルスハンまで支配していた事[192]と結びつけている。そして11～12世紀の中央ユーラシア東部の東方シリア教会全体がメルヴの大司教の管轄下にあったと推測するが、私にはいささか受け入れがたい。第５節でも紹介した吉田豊の研究[193]によっても、トゥルファンのウイグルのキリスト教団はセミレチエのキリスト教団と結び付いていたことが強く示唆されているのであり、11 世紀以降の西ウイグル王国のキリスト教団はセミレチエもしくはサマルカンドの大司教座と連携していたとみなす方がいいのではなかろうか。

註

１）森安 1982「景教」。出版は 1982 年であるが、その執筆と原稿提出はそれより６～７年も前のことである。

２）佐伯 1943a, pp. 114–120; Tang 2009, pp. 437–438.

３）Mingana 1925, pp. 305–306; 佐伯 1943a, p. 126; Tang 2009, pp. 438–439; Niu 2010, pp. 9–10; Dickens 2010, pp. 121–122.

４）トルコ族に限定されないが、やはりトルコ族の例がよく知られている［cf. 村上 1970, pp. 324–325; Atdaev 2016］。例えばウイグルのジャダ石はタミーム＝イブン＝バフルの記事や『旧唐書』迴紇伝から知られる［cf. Minorsky 1948, p. 285; 佐口 1972, p. 336］。また第３節で言及するサーマーン朝のアミール・イスマイールが 893 年にタラスにいたトルコ族（具体的には後述するようにカルルク族のはず）と戦って勝利し、キリスト教会をモ

スクに変えさせた時、トルコ族はジャダ石の魔術で抵抗したが、イスマイールはアッラーの御加護で異教徒を追い払ったという［cf. Frye 1954, p. 150, n. 295］。

5）東方シリア教会とは、英語の East Syrian Church ないし Church of the East の訳語で、従来のいわゆるネストリウス派キリスト教会のことである。近年の欧米学界では Nestorian Christianity（ネストリウス派キリスト教）という用語は不適当だとして East Syrian/Syriac Christianity と呼ぶようになっているが［cf. Tang 2011, pp. XVI–XVII］、日本ではまだ東方シリア＝キリスト教という名称は一般化していないので、本稿では便宜的にネストリウス派キリスト教もしくはネストル教という呼称も併用する。

6）岡本 1984, p. 81.

7）Cf. 吉田 2011a, p. 26.

8）Cf. Stark 2007.

9）テズジャンはこのトルコ族を、かつてエフタルの支配下にあったものとみなしている［Tezcan 2020, p. 208］。問題のトルコ族の居住地をトランスオクシアナではなくトハリスタンとみなす点でのみ、私と同意見である。さらにエフタル自身をトルコ系とみなす説も考慮すると、事態はいっそう錯綜するが、私は本文で述べる通り、問題のトルコ族は突厥の一部であろうと考えている。

10）Cf. 内藤 1988, pp. 222–226, 234.

11）Cf. 内藤 1988, pp. 206–207, 213–215, 222, 258–259; 稲葉 2004, pp. 370, 354 (= pp. 13, 29).

12）Cf. 水谷 1971, p. 32.

13）Sims-Williams 2012, pp. 68, 88 の文書 N および Q では “the *tapaghlïgh iltäbär* of the *qaghan* prosperous in glory” とあるが、吉田豊教授の教示により、tapaghlïgh をイルテベルの名前ではなく、トルコ語の「奉仕する、お仕えする」の意味にとる。文書 N と Q の紀年には42年もの間隔がある点を考慮すれば、tapaghlïgh を固有名詞と見なすのは不適であろう。なお、稲葉 2004, p. 354 (= p. 29) は Sims-Williams の旧訳に拠っており、しかもバクトリア語文書に使われた暦は西暦 233 年から始まるバクトリア紀元とみなしたシムズ＝ウイリアムズ説［cf. Sims-Williams 1997, p. 13; シムズ＝ウイリアムズ 1997, p. 9］に従って、バクトリア語文書 N の紀年である 407 年を 639 年とするが、ここではその後の研究［Sims-Williams 2020, pp. 231–235］を踏まえ 223 / 224 年を元年とするササン朝紀元と見て 629 / 630 年に改める。

14）Cf. 内藤 1988, pp. 215, 259.

15）Cf. 稲葉 2004, p. 354 (= p. 29).

16）ハラジュについては稲葉穣の一連の研究に頻出するが、特に 2004 年の論文が詳細である。

17）Cf. 稲葉 2004, pp. 372–371, 361 (= pp. 11–12, 22).

18）Cf. 佐伯 1943a, pp. 187–188; 中田 2011, pp. 178–179. さらに中田 2011, pp. 180–181 で紹介される李素墓誌によっても、8 世紀前半のトハリスタンにキリスト教徒の一族の存在したことが窺える。

19）Mingana 1925, p. 306; 佐伯 1943a, p. 127; Niu 2010, p. 10; Dickens 2010, pp. 117–121, 131; Dickens 2015, p. 15; Dickens 2019, p. 589.

20）Cf. Mingana 1925, p. 308; Hunter 1991, p. 157; Hunter 1996, p. 137; Niu 2010, p. 10.

21）Dickens 2010, pp. 122–123.

22）Cf. Sims-Williams 1991, p. 532a; Hunter 1992, p. 366; Sims-Williams 2009, p. 273; Tang 2009, pp. 443–444; Dickens 2010, p. 123; ラ＝ヴェシエール 2019, p. 230.

23）Hunter 1991, pp. 158–159. Cf. Dauvillier 1948, p. 285; Pelliot / Dauvillier 1973, p. 119.

24）Dickens 2010; Dickens 2015, p. 16. なお吉田 2018, pp. 175–180 では Beth Ṭurkāyē「トルコ人の土地」がソグド語では Twrkstan「トルキスタン」と呼ばれていたセミレチエに相当すると主張しつつ、このディケンズの比定に賛同する。

25）森安 2015, pp. 61, 128.

26）森安ほか 2009, 北面 11 行目、南面 1, 4 行目。

27）Minorsky 1948; 森安 2015 の第 4 論文「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」の第 4 節 , pp. 247–249 を参照。

28）吉田 2018, pp. 163–164; 吉田 2019, pp. 46–47. ただし吉田は、タミームの旅行年次を 821 年とするミノルスキー説が学界で定説となっている点に強い疑問を呈し、それより十数年早かったとする考えを表明している［吉田 2019, pp. 34, 36–37, fn. 6］。後註 40 を参照。

29）Lurje 2010, pp. 219–220; 吉田 2018, p. 160. 玄奘の旅行記により、7 世紀前半には確実にソグド語・ソグド文化圏に含まれていたことの分かるセミレチエ西部のチュー河～タラス河流域であるが［cf. 護 1976, pp. 179–182］、その地域を 8 世紀前半に支配したトゥルギシュ（突騎施）の発行したコイン銘文がソグド語であったことは周知の通りであり［cf. 護 1976, pp. 196–201; 護 1992, pp. 187–199］、それに引き続いてカルルクもソグド語銘のコインを発行していた事実が明らかになったことは極めて意義深い。

30）Pritsak 1951, pp. 282–284; Pritsak 1954, p. 24. 欧米におけるカラハン朝研究の開拓者はプリツァクであるが、日本では代田貴文の業績がもっと注目されてよい［代田 1976, 1992, 2001］。

31）このプリツァクの早期説を山田信夫も代田貴文も支持している［山田 1971a, p. 483 ＝山田 1989, p. 207; 代田 2001, pp. 17, 22］。カラハン王家の起源をカルルクとみなす両人にとっては、この Bilgä Köl Qadïr Qan をカラハン朝の初代可汗とみなすのは当然である。とはいえ私は、カラハン王家の起源がカルルクかウイグルかヤグマーかまだ決めかねているので、カラハン朝は 940 年代にサトゥク＝ボグラ＝ハン（955 / 956 年没）が建国したものとするバルトリド以来の通説に従っておく。因みにカラハン朝の終焉は、従来は 12 世紀の初めのカラキタイ

による征服とされてきたが、カラキタイはあくまでセミレチエに本拠を構えてカラハン朝と西ウイグル王国を間接支配しただけであるという見方が最近は有力であり、私もそれに従いたい。たとえカラハン朝がカラキタイに完全に征服されたとしても、西ウイグル王国は決してそうではなかったというのが私の考えである。

32）Cf. Minorsky 1937, §15 (pp. 97–99), Commentary on §15 (pp. 286–297), Map v on p. 279 & Map vi on p. 299.

33）後註 48 で紹介するように、10 世紀後半に属する敦煌文書 S. 383「西天路竟一本」にはカルルクが「割鹿国」として見えている。それは旅程から見て明らかに天山南路北道で、クチャとカシュガルの中間にあるアクスあたりを指している。また 12 世紀のイドリーシーの書には、タラスから東へ数日、下バルスハンを越えたあたりにカルルクの冬営地がある、と報告されているという［cf. 稲葉 2004, p. 360］。

34）なおシムズ＝ウイリアムズがディケンズより１年前に、「一方、キリスト教はソグド人植民者によって、ソグディアナ東北方でバルハシ湖とイシック湖の間にあるセミレチエにもたらされたようであり、そこでトルコ系のカルルク族の支配下で８～ 10 世紀に栄えていた」［Sims-Williams 2009, p. 273］と述べているのは、まったく論証抜きではあるが注目される。

35）Cf. Minorsky 1948, p. 301; Golden 1992, p. 199; 吉田 2019, pp. 41, 47.

36）Barthold 1913, p. 766b; Golden 1990, p. 350.

37）Minorsky 1948, p. 301; Pritsak 1951, p. 278; Karev 2015, p. 312; 森安／吉田 2019, p. 43; 吉田 2019, p. 47.

38）森安／吉田 2019, p. 43; 吉田 2019, pp. 46–47 & fn. 28.

39）Cf. Dickens 2010, pp. 130–131; 松井 2014, p. 273; Dickens 2019, p. 591.

40）Cf. Barthold 1968, p. 202; Pritsak 1951, pp. 278–279; 代田 2001, p. 17; Frenkel 2005, p. 207; 吉田 2019, pp. 50–51. なお吉田はこの史料も、タミームの旅行記の年代を 821 年とするミノルスキー以来の定説に疑義を唱える材料としている。前註 28 参照。

41）Frye 1954, pp. 86–87. Cf. Pritsak 1951, p. 289; Barthold 1968, p. 224; Golden 1990, p. 352; 陳懐宇 1999, pp. 186–187; Dickens 2010, pp. 127–128; Dickens 2015, p. 16; Dickens 2019, p. 589.

42）Pritsak 1951, pp. 287–288.

43）Pritsak 1951, pp. 289; Frye 1954, p. 150, n. 295; Dickens 2010, p. 128.

44）Pritsak 1951, p. 289; Barthold 1968, p. 224; Dickens 2010, p. 128. Cf. Dauvillier 1948, pp. 285–286; Golden 1992, p. 193.

45）Cf. 代田 2001, pp. 11–12; 小田 2003.

46）Pritsak 1954, pp. 21–22; 山田 1971a, p. 483 ＝山田 1989, pp. 206–207; 代田 2001, pp. 10–14.

47）山田 1971a, pp. 480–486 ＝山田 1989, pp. 204–210; 山田 1971b, pp. 315–316; 代田 2001, pp. 11, 14, 18. 代田をカルルク説に分類したが、それは政権の中核をカルルクとみなすからで、本人は「カラ＝ハーン朝政権は、あくまでもカルルクを中核として、ウイグルとヤグマーが行政面を、チギルが軍事面を補佐した四部族連合政権ではなかったろうか」と述べている。それはともかく、山田信夫・代田貴文両氏が、安部健夫の主張するような西ウイグル王国を大国とみなし、初期のカラハン朝は西ウイグル王国の附傭国に過ぎなかったという説を退けている点は、大いに納得でき、賛成である。

48）プリツァク説に従い、カラハン朝の始まりを 840 年代にまで遡らせる代田は、カルルクについての情報が 9 世紀以降漢籍から消えるとし、その理由として、「カルルクがカラ＝ハーン朝政権を打ち立て、かつイスラームに改宗して、かつてのカルルクとは様相を異にしたため、別の名称におきかえられたのではなかろうか」［代田 2001, pp. 17–18］とする点には注意が必要である。まず、カルルクについての情報は 9 世紀以降漢籍から消えてはおらず、10 世紀後半の王延徳『高昌行記』には西ウイグル王国の周辺勢力の一つとして「割禄」が見える。さらに北宋からタリム盆地経由でインドへ赴いた人物の旅程を記した敦煌文書 S. 383「西天路竟一本」には、カルルクが「割鹿国」として現れている。後者の場合、その割鹿国は天山南路北道の亀茲国（クチャ）と疏勒国（カシュガル）の間に位置しており、アクス一帯に相当すると考えられる。本文書は 10 世紀後半に属するものであるから、カラハン朝の起源を 10 世紀中葉とする従来の説でも 840 年代にまで遡らせるプリツァクや代田の説でも、この割鹿国はカラハン朝の一部ということになるが、明らかにカルルクの名前は存在し続けている。もちろんそれはイスラム側の『世界境域志』の情報とも矛盾しないどころか、むしろ肝胆相照らすものである。カラハン朝がイスラム国家になるのは、サトゥク＝ボグラ＝ハン伝説に重きを置いて、10 世紀中葉とする点で学界に異論はなく、それ以前のカルルク国がキリスト教を奉じていたとみなす余地はじゅうぶん残されている。

49）私は、そもそもヤグマーとは、三姓カルルクの一姓である「謀落」と、東ウイグル時代の懐信・保義両可汗時代の西方遠征時にセミレチエに残留したウイグルと、西遷ウイグルの一部などが寄せ集まったものではないかと疑っている。『世界境域志』のヤグマーの条によると、その王はトグズグズ（＝ウイグル）出身とされ、B.lāk という構成部族がいて、それはトグズグズとの混血だとされる［Minorsky 1937, pp. 95–96］が、その B.lāk とは漢籍で三姓カルルクの一つとされた「謀落」に比定されよう。

50）後註 79 とその本文参照。

51）Dickens 2010, pp. 123, 128–129.

52）Pritsak 1951, pp. 288–291; Golden 1990, p. 357.

53）Dickens 2010, p. 129.

54）Cf. Martinez 1983, p. 141; Dickens 2019, p. 594; Dickens

2020, p. 17.

55）Dickens 2019, p. 589. そもそもディケンズは、テモテ一世の時にトルコ人（具体的にはカルルク）のために新設された大司教座はタラスに置かれたという考えであった［Dickens 2010, p. 128; Dickens 2015, p. 17］。

56）イスラム史料に Mīrkī として見えるメルケ Merke は、タラスとスイアブの中間にある千泉＝屏聿（へいいつ）のことである。屏聿は古トルコ語で「千の泉」という意味の Bing yul の音写である。近代トルコ語では「千の泉」は Ming bulaq となる。水谷 1971, p. 22 の説明にはいささか誤りがある。『大唐西域記』はここを突厥の可汗の避暑地とし、『世界境域志』ではカルルクの居住地となっている［cf. 水谷 1971, p. 21; Minorsky 1937, p. 97］。

57）Cf. Dickens 2019, p. 589.

58）アクベシム遺跡が中世のスイアブ、すなわち漢籍の砕葉／素葉に当たることを初めて唱えたのはクローソン［Clauson 1961］であり、以後、それは定説となっている［cf. 護 1976, pp. 181–182, 192–195; 山内／岡田 2020］。

59）Cf. Klein 2004, pp. 27–30; Dickens 2010, p. 129; Dickens 2015, p. 28; 山内／岡田 2020, pp. 247, 310.

60）Klein / Reck 2004. これは高位の聖職者が持つ杖の先につける十字架だったようである。

61）Cf. Dickens 2019, p. 594.

62）Cf. Livshits 2015, pp. 271–282; 山内／岡田 2020, p. 311b. チュー河流域の都市遺跡の分布状況については、巻頭図版 1-1 を参照。その出典は帝京大学文化財研究所（編）『アク・ベシム（スイヤブ）2019』（帝京大学シルクロード学術調査団研究報告３，2020）である。

63）Livshits 2015, pp. 271–282; 吉田 2017a, pp. 163–164. 吉田はそのうちの一つの年代を西暦 811 年に比定して、年代論に貢献した。

64）Cf. 山内／岡田 2020, pp. 264–266, 270–274.

65）Cf. Dickens 2010, p. 129.

66）Dankoff / Kelly 1982, I, pp. 84, 352. Cf. Borbone 2015, pp. 135–136, n. 54; 森安 2015, p. 602; ラ＝ヴェシエール 2019, p. 304.

67）Cf. Tang 2009, p. 444.

68）Cf. 中田 2011, pp. 182–184.

69）カラハン朝の首都ベラサグンは、バルトリドやベルンシュタム以来長らくアクベシム遺跡とみなされていたが、Clauson 1961 によってそれは明確に否認され、現在はブラナ遺跡に比定されている［cf. Klein 2004, p. 31］。

70）Cf. Chwolson 1890, 1897; 佐伯 1943a, pp. 529–592; Sims-Williams 1991, p. 532a; Klein 2000; Desreumaux 2015.

71）Borbone 2015, pp. 135–136, fn. 54.

72）かつては９～ 14 世紀とする見解もあったが、今では古い年代付けは否定され、ほぼ 13 ～ 14 世紀に収まっている。Cf. Sims-Williams 1991, p. 532; Dickens 2010, p. 130, fn. 95; Dickens 2015, p. 28.

73）Moriyasu 2003, chapter IV; 森安 2015 の第 16 論文「西ウイグル王国におけるマニ教の衰退と仏教の台頭」の第３節「カラハン朝内のマニ教徒集団の存在」（pp. 599–604）。さらに吉田 2017b, p. 561 で指摘されるように，トゥルファン出土の細密画入りマニ教写本にタシケント出身者の人名が見える事実も追加される。

74）森安 2015, pp. 594–599, 610–617.

75）森安 1991『マニ教史』pp. 147–150; Clark 2017, pp. 359–374. ただしケッド＝オグルがアルグ国出身である事実を突きとめたのはクラークの功績である。

76）森安 2015 の第 16 論文、pp. 601–602 & notes 30, 31, 32 を参照。ただし、そこでは見落としていたが、すでに Minorsky 1937, p. 290, fn. 2 で簡単ながら同様の指摘がなされていたことを追記する。幸いこの比定は吉田豊の支持を得た［吉田／古川 2015, p. 34］。

77）Minorsky 1937, p. 98.

78）吉田 2018, pp. 162–165; 吉田 2019, p. 47.

79）Mingana 1925, pp. 324–325; Dauvillier 1948, p. 287; Hunter 1992, p. 368; Hunter 1996, p. 137; Dickens 2010, p. 123; Tang 2011, p. 32.

80）Cf. Hunter 1996, p. 137; Dickens 2010, p. 123.

81）Dauvillier 1948, pp. 288–291; Pelliot / Dauvillier 1973, p. 7; Sims-Williams 1991, p. 532.

82）Cf. Livshits 2015, pp. 271, 274, 277. ただしクラスナヤ＝レチカではまだキリスト教会そのものの遺跡は発見されていない。

83）テモテ一世がトルコ族の土地に設置した大司教座をタラスであったとみなすディケンズ［Dickens 2010, p. 128; Dickens 2015, p. 17］に対して、吉田豊と山内和也はそれはスイアブ（アクベシム遺跡）であるとする［吉田 2020, p. 193; 山内／岡田 2020, p. 251b］。私はスイアブ説に賛成する。

84）Cf. 護 1976, pp. 191–192, 194; 山内／岡田 2020, p. 301. さらに柿沼 2019, p. 56, n. 3 によれば、「2011–2013 年には東京文化財研究所・奈良文化財研究所・キルギス民族科学院が考古調査を行い、アク・ベシム遺跡は 10 世紀末～ 11 世紀初にすでに遺棄されていたとした」とあり、山内／岡田 2020, p. 319 の訳註 10 では、「カラハン朝期には、教会はすでに機能を失っていた可能性が考えられる」とされている。

85）Cf. 志茂 1995, p. 489; 志茂 2013, pp. 810, 938, 944, 949.

86）佐伯 1943a, pp. 534–592.

87）タルサー tarsā ／タルサ tarsa がキリスト教徒を意味することについては、第８節の註 135 に対応する本文を参照。

88）Cf. Dickens 2020, p. 20.

89）森安 1991『マニ教史』＝ Moriyasu 2004.

90）Minorsky 1937, p. 95. Cf. Dickens 2019, p. 594.

91）Cf. Martinez 1983, p. 134; 森安 1991, p. 163 ＝ Moriyasu 2004, p. 196; Dickens 2019, p. 594.

92）Cf. 森安 1991, pp. 142–143, 159; Wang 2016, pp. 333–336.

93）Cf. Wang 2016, p. 339.

94）代田は『遼史』本紀に 923 年に朝貢してきたとされる「波斯国」をサーマーン朝に比定している［代田 1992, p. 49］。

95）両者の旅行記のテキストと訳註に関しては、佐口 1970, pp. 434–435 にある文献解題や Pelliot / Dauvillier 1973、高田 2019 を参照。和訳として従来は、護 1965 がよく利用されてきたが、最新の高田 2019 は原典からの翻訳ゆえ価値が高い。なお杉山正明は、カルピニ出身のヨハネの記録に比べてルブルク出身のグリエルムスの記録の方が遙かに信頼性が高いことを指摘している［杉山 2008, p. 238］。

96）Cf. 愛宕 1970, pp. 114, 121, 127, 129, 160–165; 高田 2019, pp. 316, 319, 322, 338–339.

97）Cf. Moriyasu 2019, p. 148.

98）Cf. Sims-Williams 1990 “Bulayïq”; Hunter / Dickens 2014 (eds.) , pp. ii, 1; Barbati 2015, pp. 89, 90, 93.

99）Bulayïq / Buluyuk と Qurutqa / Kurutka と Šui-pang / Shipang の位置関係については、次のいずれかの地図を参 照：Le Coq 1923, p. 22; Stein 1921, vol. V, Maps, sheet No. 59.

100）例えばディケンズがそうである［Dickens 2015, p. 18; Dickens 2019, p. 602］。

101）陳懐宇 1999, p. 187.

102）前註 73 とその本文を参照。

103）吉田 2017a, pp. 169–171.

104）ソグド系ウイグル人ないしソグド系ウイグル商人については、森安 1997a（森安 2015 の第 10 論文として再録）の第７節「ソグド商人からウイグル商人へ」、及びそれを補強してくれる吉田 2011b, pp. 23–24, 31–40 を参照されたい。吉田説を取り入れて改めてソグド系ウイグル人を定義すれば、ウイグル国にやって来てウイグル語を日常的に使用するようになったソグド人とその後裔である。当然ながら身体的にはコーカソイドであるソグド人の特徴を持っている。概説的には、松井 2014, pp. 270–271 を参照。なお仏教徒のソグド系ウイグル商人の肖像が、ベゼクリク千仏洞の壁画に残されている。巻頭図版 2-1 参照［出典は Le Coq 1913, pls. 22 & 28］。

105）Biran 2001; Biran 2013; Biran 2015. 同様に代田 1976, 代田 1992, King 2013, Duturaeva 2016 もカラハン朝と遼（契丹）の貿易や国交について論じている。一方、Duturaeva 2018 はカラハン朝と宋との交渉に注目している。

106）King 2013 論文は、全体として契丹の麝香がいかにイスラム世界で有名だったかを論じている。

107）ビールーニーが契丹人は琥珀を好きだと述べているように、実際、遼朝の王族・貴族の墓から大量の琥珀製品が出土しているが、その琥珀はバルト海産であり、ブルガールとホラズムを通じてカラハン朝へ、さらに西ウイグルや西夏を通って契丹へもたらされたものであるらしい［cf. Biran 2013, pp. 235, 237; Duturaeva 2016, pp. 200–201］。

108）According to Raschmann 2009, p. 414, “The body of the letter is chiefly concerned with commercial transactions, that is the delivery of different goods.”

109）Cf. Zieme 2015a, pp. 191–195.

110）Cf. 森安 2015, pp. 444–446, 479–480, 648.

111）森安 2011, pp. 18–20, 53–55; Moriyasu 2019, pp. 11–12.

112）このシリア文字ウイグル語テキストは、全文のドイツ語訳註が Zieme 2015b, ATKOZ, pp. 125–130 において Text M “Altuigurischer Text über Gott und Teufel” として発表されただけでなく、その抜粋が Zieme 2015a, pp. 191–192 においてフランス語で紹介された。その 31 行目にはウイグルが通常の ’WYXWR (uyγur / uiγur) ではなく qwygwr (huigur) と表記されていた。さらにソグド語の手紙のなかにウイグルを γ’yγwr と表記している実例まで見つかっている［Bi / Sims-Williams 2015, pp. 262, 268］。このように語頭に q- / γ- 音を持つほうが、漢語の「迴紇／回鶻」に正しく対応するのである。

113）現代のように便箋を１～２回折り畳むだけで、広い平面が残っていては、それを大きな袋に入れてキャラヴァンで輸送する途中に揺れや圧力で変形し破れてしまう。だから小さく折り畳んで小さな封筒に入れる。それゆえ手紙の実物には、短冊状の折り跡が強く残るのが通例である。

114）本名は Bar ‘Ebroyo というシリア人であり、アラブ名 Abu’l Faraj Ibn al-‘Ibri をも持っているが、本稿では一般によく知られているラテン名を使う。

115）高橋英海教授の教示によれば、シリア語で書かれた『シリア編年史』と『教会編年史』は、著者の意図としてはそれぞれ世俗史と教会史を扱う部分からなる二部構成の一つの作品であったのに、写本では別々に伝わっていることが多く、現在では通常別々の作品として扱われているという。

116）1007年はヒジュラ暦 398 年の西暦への換算結果なので、正しくは 1007 / 1008 年とすべきであろう。同じ事件を 1009 年とする説もあるが、近年の研究者は 1007 年で代表させているので［cf. Hunter 1991, p. 144, fn. 7 及び p. 145, fn. 12; Hunter 1992, p. 365; Tang 2009, p. 440; Atwood 2014, p. 516; Borbone 2015, p. 126; 馬曉林 2018a, p. 202, fn. 3］、本稿でもそれに従うこととする。

117）私はシリア語が読めるわけではないので、この要約は佐伯好郎の和訳や他のいくつもの欧文論文に見える英訳や仏訳を参照してまとめたものである。Cf. Mingana 1925, pp. 308–309; 佐伯 1943a, pp. 130–131; Dunlop 1944, pp. 277–278; Hunter 1991; Niu 2010, pp. 12–13; Tang 2011, p. 28; Atwood 2014, pp. 516–517; Borbone 2015, pp. 126–127. なおこの伝承は、岡田 1992, p. 175、岡田 1994, pp. 205–206 や付馬 2019, p. 193 でも取り上げられている。

118）高橋英海教授の教示によれば、この『塔の書』は 11 世

紀に主要部が書かれ、14 世紀まで書き足されていったものであり、その著者としてはアムル＝イブン＝マッター Amr ibn Matta' やマーリー＝イブン＝スライマーン Mari ibn Sulaymān（名前に似合わず Nestorian）やサリーバー＝イブン＝ユーハンナーなどが知られているという。因みにこの直後に引用する伝承の作者は、かつてはマーリー＝イブン＝スライマーンと考えられており、ハンターやアトウッドはまだそうしていたが［Hunter 1991; Atwood 2014］、今ではアムル＝イブン＝マッターとするのが正しいとされる［cf. Borbone 2015, p. 125; Tezcan 2020, p. 208, n. 70］。

119）このアラビア語テキストからの引用も、佐伯好郎の和訳や他のいくつもの欧文論文に見える英訳や仏訳［Mingana 1925, pp. 310–311; 佐 伯 1943a, pp. 132–133; Dunlop 1944, pp. 278–279; Hunter 1991; Niu 2010, p. 11; Atwood 2014, pp. 517–518; Borbone 2015, p. 125］を参照してまとめたものである。

120）Cf. Pelliot / Hambis 1951, p. 208; 陳得芝 1986, p. 210, fn. 1; Hunter 1991, p. 143; Hunter 1996, p. 139.

121）後註 139 を参照。Cf. Dickens 2015, p. 19; Dickens 2019, p. 602; 付馬 2019, p. 193.

122）Cf. Atwood 2014, p. 517; Borbone 2015, pp. 128–129 & n. 21.

123）オングート部の主邑がオロンスムであり、そこにキリスト教の遺跡・遺物が残っていることを発見したのは、戦前に現地調査した江上波夫の功績である［江上 1955; 江上 1967, 第 12 章］が、それ以後、多数の関係論著が欧文や中文で出版されている。Cf. 横浜ユーラシア文化館（編）『オロンスム　モンゴル帝国のキリスト教遺跡』横浜，横浜ユーラシア文化館，2003 年。

124）Cf. 佐伯 1943b, pp. 414–473; 長田 1952, p. 51; Enoki 1964, pp. 50–51; 江上 1967, pp. 289, 298–299.

125）Cf. 櫻 井 1936a, pp. 666–667; 佐 伯 1943b, p. 472; 岡 田 1992, p. 177; 殷小平 2012, p. 155; 白玉冬 2018, pp. 145–146.

126）オングートという民族名がオング／ウングに由来し、その複数形であることは、マルコ＝ポーロの Tenduc（天徳）の記事や、マルコスとサウマー師が 1280 年頃にそれぞれ「カタイとオングの大司教区」の大司教や「タングートとオングの司教区」の司教に任命された事実からも裏付けられ、もはや定説である［cf. Pelliot 1914, pp. 629, 632, 635; Pelliot 1930, p. 310; 佐伯 1943b, p. 472; Dauvillier 1948, p. 302; 江上 1967, p. 327; Paolillo 2013, p. 238］。ただしそのオング／ウングの語源については、金朝の北辺を守る「長城・界壕」とする説や「陰山・天山」説、ウイグル語の öng「前方・東方」とする説などがあるが［cf. 殷小平 2012, p. 155; 馬暁林 2018a, p. 200］、とりあえずは「東方」説［cf. 周清樹 1980; Niu 2010, p. 15; 白玉冬 2018, p. 153］に従っておきたい。

127）つい最近の研究者も含め、従来は「卜國」を東ウイグル帝国第三代可汗でマニ教を導入した牟羽可汗の名前 Bögü に当ててきたが、それは大きな間違いである。これについては森安 2015, 第 14 論文「東ウイグル帝国マニ教史の新展開」の第５節「ブクハン問題再考」（pp. 547–553）を参照していただきたい。

128）Cf. Moule 1930, p. 94, n. 2; Dunlop 1944, p. 287; Enoki 1964, p. 51; 江上 1967, p. 271; Paolillo 2013, p. 249.

129）Cf. Pelliot / Dauvillier 1973, pp. 242–243, 245.

130）Cf. Pelliot / Dauvillier 1973, p. 244; Paolillo 2013, p. 241; 白玉冬 2018, p. 146.

131）「沙陀三部落」については関連論文が多いが、とりあえずは最新の山下 2019 を参照。

132）Cf. Paolillo 2013, pp. 240–243. Paolillo はウイグル説なのか沙陀説なのか分かりにくいが、pp. 249–250 によれば、ソグド人との関係を重視しているようである。

133）例えば Paolillo 2013, p. 248 では、オングートは陰山タタルとウイグルと沙陀の雑種であろうと言う。党宝海 2018, p. 280 では、漠南のウイグルを中核として、雑多な部族集団を合併したものとする。

134）陳垣 1938, pp. 247–248；党宝海 2018, p. 280; 白玉冬 2018, p. 147.

135）Cf. Sims-Williams 2009, p. 270; Tang 2011, pp. 52–53; 殷小平 2012, p. 44; 付馬 2019, pp. 181–182; Dickens 2020, pp. 10–14, 18–19.

136）『世界境域志』によれば、西ウイグル王国のおそらく天山北麓にキリスト教徒（tarsāyān）を含むあるソグド人集落のあったことが知られるが［Minorsky 1937, p. 95］、当然ながらそのソグド人はその頃までにウイグル語化していたはずである。前註 104 参照。因みにウイグル語でネストル教徒を指す言葉としては漢語の也里可温に対応する ärkägün / ärkä'ün がよく知られているが、トゥルファン出土文書の U 322 (T II B 65), Ch/U 8118 (T II T 1222) にはソグド語から借用された tarsak も現れる［cf. Zieme 1974, p. 664］。

137）馬暁林 2018a, p. 204 によれば「馬氏世譜」の成立は 1348 ～ 1349 年である。

138）「馬氏世譜」の記述からは、遼朝の馬歩軍指揮使になったかのように読み取れ、『元史』巻 134・月合乃伝では金朝の馬歩軍指揮使となったとされるが、馬暁林や党宝海はそれは誤りで、正しくは北宋で単なる指揮使になったにすぎないとする［馬暁林 2018a, pp. 199, 206; 党宝海 2018, pp. 282, 284］。

139）これは金朝の太宗が狩猟に出かけたが恍惚状態に陥ってしまい、金人が太陽を手挟みながら歩いて行くのを見て驚愕し、狩猟を中止して引き返したという話であり、それが馬氏の先祖の移住と結び付いているのである。Atwood 2014 や馬暁林 2018 はこれを 1007 年のトルコ族のキリスト教改宗伝説と結びつけ、1007 年に改宗したトルコ族とはオングートだと主張するのである。しかし、両伝説のプロットはまったく違っており、

私はアトウッドや馬暁林の主張に従うことはできない。

140）「馬氏世譜」ではこの始祖の名を和禄朶思としている。かつてそれは典型的なキリスト教徒名である Gewargis の転訛の Wargis と見なされたが、最近は Hormizd の転訛の Hormiz とみなされ、それが正しいと思われる［cf. Paolillo 2013, p. 246; 馬暁林 2018a, pp. 206–207］。もちろん、これもキリスト教徒名とみなされる。

141）殷小平 2012, p. 164.

142）馬暁林 2018a, p. 205.

143）前註 104 参照。

144）森安 2015, p. 552.

145）この点では白玉冬 2018, p. 147 と同じ見方である。なお私は本稿でオングートを構成する家系の三つだけに論及したが、白論文の第２節は「汪古部五大代表性集団淵流」となっていて、五つの家系に論及している。

146）Cf. 前田 1948, p. 234; Pelliot / Hambis 1951, p. 2.

147）Toquz Tatar の出典について詳述するのは煩瑣になるので、とりあえずは次を参照されたい：前田 1948, p. 244; 白玉冬 2011a, p. 86; 白玉冬 2011b, pp. 03, 011. なお古くは Pelliot 1920, p. 148 にも言及があった。

148）前田 1948, pp. 242–250, 254, 256–257; 村上 1965, pp. 138–141; 村上 1972, pp. 30–34; 陳得芝 1986, pp. 208–218; 白玉冬 2011b, 01, 03, 07, 015, 020–022; 白玉冬 2011c, pp. 1, 28; 白玉冬 2015, p. 014. Cf. 岡本 1980, p. 51. なお白石典之によって、８世紀の九姓タタルが 10 ～ 11 世紀の九族達靼になったとする前田直典由来の説は、土器などの比較検討から考古学的にみても合理性のあることが確認されている［白石 2001, pp. 011–021］。

149）ナイマン族については、元はトルコ系であったが後にモンゴル化したという説もあるが、トルコ系とみなす説の方が圧倒的に有力である。Cf. 村上 1970, pp. 319–320; Tang 2011, pp. 29–32. なお前田 1948, p. 249 ではナイマンを Säkiz Oγuz「八姓オグズ」の後裔だと見なしている。

150）九姓タタル＝阻卜＝ケレイトという見方が正しいとすると、私が敦煌出土チベット語文書 P. t. 1283 を取り上げた論文で紹介した Khe-rged がケレイトに繋がるという推定の信憑性が一層高まるであろう、cf. 森安 1977, 再録本 p. 55 & fn. 20, p. 84 の図 B, p. 87 の本文；白玉冬 2011a, pp. 97–100. しかし音韻変化に要する長い時間を考慮すれば、これをもってケレイトという部族名の初出とすることはできない。

151）Cf. Pelliot / Hambis 1951, p. 2.

152）Otuz Tatar の出典について、とりあえずは次を参照されたい：前田 1948, p. 243; 白玉冬 2011a, pp. 86, 101, 102–103.

153）白玉冬 2011a, pp. 86–87, 97–101, 103–104. なお新たに発見され、Zhang / Zieme 2011 によって発表された冊子本形式のウイグル文歴史文書には、九姓タタルのほかに六姓タタルという集団も見えている［Zhang / Zieme 2011, pp. 139, 143, 148］。その実体は不明ながら、これもおそらく三十姓タタルに含まれていたのだろう。

154）Cf. 前田 1948, p. 246.

155）白鳥「室韋考」は長大であり、論旨が摑みにくいが、とりあえずは白鳥 1970, pp. 404, 417, 426, 453–456, 458, 467, 468, 469–470, 471–472 を拾い読みされたい。なお、先にタタルに広義と狭義があると述べたが、モンゴルにも広義と狭義がある。『旧唐書』巻 199 下・室韋伝に蒙兀室韋［p. 5358］、『新唐書』巻 219・室韋伝に蒙瓦部［p. 6177］と見えるように、唐代に室韋に含まれていた蒙兀／蒙瓦が狭義のモンゴルで、後にチンギス一族を生み出す集団である。一方、広義のモンゴルとはモンゴル帝国に包摂された狭義のモンゴル部を筆頭にケレイト部・メルキト部・タタル部その他のモンゴル語を話す大集団である。つまり広義のタタルと広義のモンゴルはかなりの部分で重なるのである。

156）Cf. 陳得芝 1986, p. 203; Golden 1992, p. 285; Tang 2009, p. 441; Tang 2011, pp. 25–26.

157）Cf. Hunter 1991, p. 142, fn. 3.

158）Cf. Pelliot 1914, p. 627; Pelliot / Hambis 1951, pp. 208, 236, 238, 247; Hambis 1953; 村上 1965, pp. 139–140; 村上 1972, p. 33; Weiers 1973, pp. 552–553; 陳得芝 1986, p. 216; Hunter 1991, p. 149; Tang 2011, pp. 25, 28; Moriyasu 2019, pp. 89, 217b. なおクルジャクスの名も漢文史料に現れる［cf. 櫻井 1936b, pp. 102–103］。

159）それゆえ櫻井 1936b「怯烈考」の pp. 94–99 でケレイトの出自を検討した上でトルコ系と結論していながら、p. 103 で「黙児忽斯を以て怯烈部の祖として可ならん」としているのは、納得しがたい。なぜなら黙児忽斯とはドーソンからの孫引きに過ぎないが、その原史料は『集史』にケレイトのオンハンの祖父として見えるマルコスだからである。櫻井はこのマルコスを『遼史』に 11 世紀末～ 12 世紀初頭の阻卜の君長として頻出する磨古斯と同じとみなしたわけだから、必然的に阻卜＝ケレイトとなるはずなのに、モンゴル系説に与していないのは自己矛盾ではなかろうか。

160）Cf. Hambis 1953; Moriyasu 2019, pp. 195, 238b.

161）前田 1948, p. 238.

162）Cf. Dankoff / Kelly 1982-85, I, pp. 82, 276, 312, II, p. 334; Frenkel 2005, pp. 204–205; Stark 2007, p. 320, n. 3; King 2013, pp. 259–260. さらに Ibn al-Athīr もタタルと契丹をトルコ族とみなしているという［cf. Golden 1990, p. 354］。

163）宇野 2002, pp. 39–43, 48. ただし『集史』の「トルコ・モンゴル諸部族史」において、中央ユーラシアの遊牧諸部族のほとんどを「トルコ」と総称し、「モンゴル」がその下位グループの一つに位置付けられていることは、周知の通りである［cf. 村上 1965, p. 119; Pelliot / Dauvillier 1973, p. 243; 宇野 2002, pp. 37, 39, 40, 43, 46,

48, 53; 杉山 2008, pp. 83–84］。

164）Cf. Hunter 1991, pp. 150–151.

165）Dunlop 1944, pp. 283–288; Hunter 1991, pp. 145–150. Dickens 2019, p. 602 でも基本的にこのバル＝ヘブラエウスによる改竄説を認めている。

166）Cf. Dunlop 1944, pp. 283–285; 佐口 1968, pp. 101, 104, 225, 287; 志茂 1995, pp. 289–290, 417; Ryan 1998, p. 416; 志茂 2013, pp. 871–872.

167）Cf. 志茂 2013, p. 990.

168）Cf. 杉山 2008, pp. 185–187.

169）Cf. 佐口 1973, pp. 271, 395; Ryan 1998, p. 416.

170）Cf. Dunlop 1944, pp. 286–288; 佐口 1979, pp. 165, 166; 志茂 1995, pp. 290–291; Ryan 1998, pp. 416, 418; 志茂 2013, pp. 872, 884–885.

171）Cf. Ryan 1998, p. 416.

172）Dunlop 1944, p. 284.

173）Cf. 櫻井 1936a; Paolillo 2013; 志茂 2013, pp. 812–815; Atwood 2014; 馬曉林 2018a.

174）白玉冬 2011b, pp. 011–015, 017–022.

175）結論だけを見れば、これは岡田英弘も同意見であるが、岡田はなんらの論証なしで、バル＝ヘブラエウスが問題のトルコ族をケレイト族としたのを、そのまま受け入れただけである［岡田 1992, pp. 175–176；岡田 2013, pp. 60–61］。しかも岡田の当該箇所の記述には、キリスト教の伝播と共にアラム文字がトルコ族間に広がってウイグル文字が生まれ、それが後にモンゴル文字になったと誤解させる文章が続いている［岡田 1992, p. 176］。アラム文字に由来するソグド文字がウイグル文字になるのは、マニ教を通じてであって、決してキリスト教からではない［cf. 森安 1997b］。

176）Hunter 1996, p. 140.

177）護雅夫ほか編『北アジア史（新版）』（世界各国史 12）、山川出版社、1981、p. 144.

178）前註 104 参照。

179）文書 A ～ H と名付けられた８件のソグド＝ウイグル語文書が Sims-Williams / Hamilton 1990（略号 DTSTH）によりフランス語で発表され、その英訳が Sims-Williams / Hamilton 2015 として発表された。これらソグド＝ウイグル語文書の言語は Turco-Sogdian「トルコ化したソグド語」と呼ばれるが、その使用者は前註 104 で定義したソグド系ウイグル人である。同様の言語的特徴を持つソグド＝ウイグル語文書は、トゥルファンからも出土しており、敦煌出土の文書 A ～ H が、西ウイグル王国を本拠とするソグド系ウイグル人によって書かれたことを疑う必要はない。

180）白玉冬 2011c, pp. 22–29. ただしその p. 23 で「DTSTH にはキリスト教徒の手によるものが二件（P. 28 文書と P. 3134 の裏文書）含まれる」とあるのは不正確で、その二件とはタタルに関わる文書 A と E である。なお、文書 F と G が明らかにキリスト教徒の手紙であるが、文書 A と D もキリスト教徒の手になるものと考えられている［cf. Sims-Williams 1992, pp. 54–56］。一方、文書 G を取り上げた付馬 2019, pp. 186–194 の論述からも、白玉冬と同様の結論が得られるが、先行する白玉冬論文を引用していないのは残念である。また概説的には、松井 2014, pp. 271–272 を参照。

181）Cf. 坂本 1970, pp. 106–107, 110–111; 志茂 1995, pp. 185, 188, 382, 388; 志茂 2013, pp. 801, 808, 868, 875.

182）Cf. 森安 1997a ＝森安 2015、第 10 論文。

183）Cf. Mingana 1925, p. 323. ただし Mingana は “the 22nd, the Metropolitan of the Turks” としているが、高橋英海教授の教示によれば『塔の書』の Gismondi による校訂版のラテン語訳では “22. Metropolita Turchistanae” となっている。また Dickens 2010, p. 123 では “the Metropolitan of Turkistan”、Borbone 2015, p. 132 では “22. du Turkestan” としているので、「トルコ族の大司教」ではなく「トルキスタンの大司教」を採る。

184）ここでは大方が認知しているソグド語形の Nawīkath「新城」を採用しているが、アラビア語テキストの原文は n-w-'-k-th であり、Nawākath とも読めるし、Mingana のように Nuākith とも読める。古いところでは Siouffi 1881, p. 95 で Navaketh、Dauvillier 1948, pp. 288–291 では Navēkaθ としていたが、近年の Hunter 1996, p. 137 では Nawākath、Dickens 2010, p. 123 では Navekath、Borbone 2015, p. 132 では Nuwākiṭ としている。

185）Cf. Hunter 1992, p. 367; Dickens 2010, p. 123.

186）Cf. Sims-Williams 1990 “Bulayïq”; Sims-Williams 2009, pp. 279–280; 森安（編著）2011, pp. 550–552; Hunter / Dickens 2014 (eds.) , p. vi; Barbati 2015, pp. 92–97.

187）Grünwedel 1906, p. 166 ＝格倫威德尔 2015, p. 164. ただしそこではブライクは Bûläräk となっている。Cf. Zieme 2015b, p. 71.

188）Cf. Le Coq 1913, pl. 7; 佐伯 1943a, pp. 473–475; 陳懐宇 1999, pp. 167–169.

189）ただし陳懐宇はトゥルファン出土文書から確認される聖職者の階級は主教（司教）までであるとして、総主教（大司教）の存在を認めていない［陳懐宇 1999, pp. 182–183］。それゆえ私の推定はあくまで仮説にすぎない。

190）この事実自体は当時のシルクロードが衰退していたとする通説への反論史料となる。因みに私もこれまで、10 ～ 12 世紀には陸のシルクロードが衰退していたと見なす通説には、一貫して反対してきた［cf. 森安 2020, pp. 105–106］。

191）Cf. 陳懐宇 1999, pp. 166–167.

192）森安 2015, pp. 603, 695.

193）前註 103 とその本文を参照。

194）J・スチュアート（著）、佐伯好郎（校訂）、熱田俊貞／賀川豊彦（訳）『東洋の基督教　景教東漸史』（東京、原書房、1979 年）には当時東京大学助教授であった森

安達也による解題も付いており、一定程度の価値は失われていないと思うが、本稿で取り上げた中央ユーラシアのトルコ・モンゴル族に関わる記述に限っていえば、単純な誤りや時代錯誤があまりにも多いため、本稿では引用しなかった。

文献目録

（日中文は著者名の五十音順、欧文はアルファベット順）[194)]

稲葉 穣　2004「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方学報』76 (2003), pp. 382–313（逆頁）。

殷 小平　2012『元代也里可温考述』蘭州、蘭州大学出版社。

宇野 伸浩　2002「『集史』の構成における「オグズ･カン説話」の意味」『東洋史研究』61-1, pp. 34–61（= pp. 137–110 逆頁）。

梅村 坦　1987「ウイグル文書「SJ Kr. 4/638」—— 婚礼・葬儀費用の記録」『立正大学教養部紀要』20, pp. 35–87, incl. 10 pls.

江上波夫　1955「オングウト族の都城址「オロン・スム」」、ユーラシア学会（編）『遊牧民族の研究』京都、自然史学会、pp. 1–12, +6 pls.

江上波夫　1967『アジア文化史研究　論考篇』東京、山川出版社。第十二章「元代オングト部の王府址「オロン･スム」の調査」（pp. 265–301）、第十三章「オングト部におけるネストール教の系統とその墓石」（pp. 303–330）を含む。

岡田英弘　1992『世界史の誕生』（ちくまライブラリー 73）、東京、筑摩書房。（再刊：ちくま文庫、1999）

岡田英弘　1994『チンギス・ハーン』（朝日文庫）、東京、朝日新聞社。

岡田英弘　2013『岡田英弘著作集Ⅱ　世界史とは何か』東京、藤原書店。

岡本　孝　1980「阻卜諸部長磨古斯の叛乱」『（金沢大学法文学部東洋史）研究室誌』6, pp. 51–64.

岡本　孝　1984「ソグド王統攷 —— オ＝イ＝スミルノワ説批判を中心として」『東洋学報』65-3/4, pp. 71–104.

長田夏樹　1952「十二世紀に於ける蒙古諸部族の言語 —— Mongolo-Turcica II」『東方学』5, pp. 42–55.

小田壽典　2003「カラハン朝の起源はカルルク族か、ウイグル族か」『愛大史学－日本史・アジア史・地理学』12, pp. 1–41.

愛宕松男　1970　マルコ・ポーロ『東方見聞録 1』（東洋文庫 158）、東京、平凡社。

柿沼陽平　2019「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, pp. 43–59.

格倫威德尔、阿尔伯特（著）；管平（訳）　2015『高昌故城及其周辺地区的考古工作報告（1902 ～ 1903 年冬期）』北京、文物出版社。

川崎浩孝　1993「カルルク西遷年代考 —— シネウス・タリアト両碑文の再検討による」『内陸アジア言語の研究』8, pp. 93–110.

佐伯好郎　1943a『支那基督教の研究１（唐宋時代）』東京、春秋社。（再版：東京、名著普及会 , 1979）

佐伯好郎　1943b『支那基督教の研究２（元時代）』東京、春秋社。（再版：東京、名著普及会 , 1979）

坂本 勉　1970「モンゴル帝国における必闍赤＝ bitikçi ― 憲宗メングの時代までを中心として」『史学』（三田史学会）42-4, pp. 81–111.

佐口　透　1968 ドーソン著『モンゴル帝国史２』（東洋文庫 128）、東京、平凡社。

佐口　透　1970『モンゴル帝国と西洋』（東西文明の交流４）、東京、平凡社。

佐口　透　1972「回鶻伝（旧唐書・新唐書）」、『騎馬民族史』２（東洋文庫 223）、東京、平凡社 , pp. 299–462.

佐口　透　1973 ドーソン著『モンゴル帝国史４』（東洋文庫 235）、東京、平凡社。

佐口　透　1979 ドーソン著『モンゴル帝国史６』（東洋文庫 365）、東京、平凡社。

櫻井益雄　1936a「汪古部族考」『東方学報（東京）』6, pp. 659–680.

櫻井益雄　1936b「怯烈考」『東方学報（東京）』7, pp. 89–124.

シムズ＝ウイリアムズ、ニコラス　1997「古代アフガニスタンに於ける新知見―ヒンドゥークシュ北部出土のバクトリア語文書を中心に」『Oriente（古代オリエント博物館情報誌）』16, pp. 3–17.

志茂碩敏　1995『モンゴル帝国史研究序説』東京、東京大学出版会。

志茂碩敏　2013『モンゴル帝国史研究 正篇 中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』東京、東京大学出版会。

周　清樹　1980「汪古之族源」『文史』10, pp. 103–107.

白石典之　2001「９世紀後半から12世紀のモンゴル高原」『東洋学報』82-4, pp. 01–030.

白鳥庫吉　1970「室韋考」『白鳥庫吉全集４』岩波書店 , pp. 339–473.（初出：『史学雑誌』30-1/2/4/6/7/8, 1919.）

代田貴文　1976「カラハン朝の東方発展」『中央大学大学院研究年報』5, pp. 255–270.

代田貴文　1992「『遼史』に見える「大食（国）」について」『中央大学アジア史研究』16, pp. 54–36（逆頁）。

代田貴文　2001「カラ＝ハーン朝史研究の基本的諸問題」『中央大学附属高校教育・研究紀要』15, pp. 1–32.

杉山正明　2008『モンゴル帝国と長いその後』（興亡の世界史 09）、東京、講談社。

高田英樹　2019『原典　中世ヨーロッパ東方記』名古屋、名古屋大学出版会。

陳　垣　1938「馬定先生在内蒙発見之残碑」、『陳垣学術論文集　第一集』北京、中華書局 , 1980, pp. 244–248.

陳　懐宇　1999「高昌回鶻景教研究」『敦煌吐魯番研究』4, pp. 165–214.

陳　得芝　1986「十三世紀以前的克烈王国」『元史論叢』3, pp. 1–22.（再録：陳得芝『蒙元史研究叢稿』北京、人民出版社 , 2005, pp. 201–232.）

党　宝海　2018「11 ～ 13 世紀中国的両個景教家族」、朱玉麒／周珊（主編）『明月天山 ——“李白与絲綢之路国際学術研討会”論文集』北京、国家図書館出版社 , pp. 279–291.

内藤みどり　1988『西突厥史の研究』東京、早稲田大学出版部。

中田美絵　2011「八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界 —— 徳宗期『大乗理趣六波羅蜜多経』翻訳参加者の分析より」『関西大学東西学術研究所紀要』44, pp. 153–189.

馬　曉林　2018a「金元汪古馬氏家族先祖史的書寫與認同」『文史』2018-4（総 125）, pp. 197–209.

馬　曉林　2018b「金元汪古馬氏的景教因素新探」『中山大学学報（社会科学版）』58-2（総 272）, pp. 154–161.

白　玉冬　2011a「８世紀の室韋の移住から見た九姓タタルと三十姓タタルの関係」『内陸アジア史研究』26, pp. 85–107.

白　玉冬　2011b「10 世紀から 11 世紀における「九姓タタル国」」『東洋学報』93-1, pp. 90–116.

白　玉冬　2011c「十世紀における九姓タタルとシルクロード貿易」『史学雑誌』120-10, pp. 1–36.

白　玉冬　2015「沙陀後唐・九姓タタル関係考」『東洋学報』97-3, pp. 01–025.

白　玉冬　2018「絲路景教与汪古淵流」『中山大学学報（社会科学版）』58-2（総 272）、pp. 141–153.

付　馬　2019「唐元之間絲綢之路上的景教網絡及其政治功能」『文史』2019-3, pp. 181–196.

前田直典　1948「十世紀時代の九族達靼 —— 蒙古人の蒙古地方の成立」『東洋学報』32-1, pp. 62–91.（再録：前田直典『元朝史の研究』東京、東京大学出版会 , 1973, pp. 233–263.）

松井　太　2014「ソグドからウイグルへ」、森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』（アジア遊学 175）、東京、勉誠出版 , pp. 261–275.

水谷真成　1971　玄奘（著）『大唐西域記』（中国古典文学大系 22）、東京、平凡社。

村上正二　1965「モンゴル帝国成立以前における遊牧民諸部族について —— ラシィード･ウッ･ディーンの「部族篇」をめぐって」『東洋史研究』23-4, pp. 118–147.

村上正二　1970『モンゴル秘史１』（東洋文庫 163）、東京、平凡社。

村上正二　1972『モンゴル秘史２』（東洋文庫 209）、東京、平凡社。

護　雅夫　1965『中央アジア・蒙古旅行記　カルピニ・ルブルク』（東西交渉旅行記全集１）、東京、桃源社。

護　雅夫　1976『古代遊牧帝国』（中公新書 437）、東京、中央公論社。

護　雅夫　1992『古代トルコ民族史研究 II』東京、山川出版社。

森安孝夫　1977「チベット語史料中に現われる北方民族 —— DRU-GU と HOR」『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp. 1–48.（再録：森安 2015, pp. 49–131.）

森安孝夫　1982「景教」、前嶋信次、他（共編）『オリエント史講座３　渦巻く諸宗教』東京、学生社 , pp. 264–275.

森安孝夫　1988「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」、榎博士頌寿記念東洋史論叢編纂委員会（編）『榎博士頌寿記念東洋史論叢』東京、汲古書院 , pp. 417–441, incl. 2 pls.（再録：森安 2015, pp. 490–510.）

森安孝夫　1991『ウイグル＝マニ教史の研究』,『大阪大学文学部紀要』31/32 合併号、大阪（豊中）、大阪大学文学部。（別刷：京都、朋友書店 , 1991）

森安孝夫　1997a「《シルクロード》のウイグル商人 —— ソグド商人とオルトク商人のあいだ」、『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合』東京、岩波書店 , pp. 93–119.（再録：森安 2015, pp. 407–435.）

森安孝夫　1997b「ウイグル文字新考 —— 回回名称問題解決への一礎石」、『東方学会創立五十周年記念 東方学論集』東京、東方学会、pp. 1238–1226（逆頁）.

森安孝夫　2007『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史 05）、東京、講談社。

森安孝夫　2010「日本に現存するマニ教絵画の発見とその歴史的背景」『内陸アジア史研究』25, pp. 1–29.

森安孝夫　2011「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式（前編）」『大阪大学大学院文学研究科紀要』51, pp. 1–86.（和文版：pp. 1–31 + 和英文献目録 in pp. 70–86.）

森安孝夫　2015『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋、名古屋大学出版会。

森安孝夫　2016『シルクロードと唐帝国』（学術文庫版「興亡の世界史」）、東京、講談社。

森安孝夫　2020『シルクロード世界史』（選書メチエ 733）、東京、講談社。

森安孝夫（編著）　2011『ソグドからウイグルへ —— シルクロード東部の民族と文化の交流』東京、汲古書院。

森安孝夫／吉田　豊　2019「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳註」『内陸アジア言語の研究』34, pp. 1–59, +1 table.

森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村　健／白　玉冬　2009「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1–92, +12 pls.

山内和也／岡田保良　2020「スイヤブ（アク・ベシム遺跡）のキリスト教会—第８号遺構：キリスト教会複合体」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 247–319.

山下将司　2019「朱耶氏と沙陀三部落 —— 唐末の代北におけるテュルク・ソグド軍団」『メトロポリタン史学』15, pp. 25–48.

山田信夫　1971a「トルキスタンの成立」『岩波講座 世界歴史 6 古代 6』岩波書店 , pp. 463–490.（再録：山田 1989, pp. 189–213.）

山田信夫　1971b「トルコ族とソグド商人」、山田信夫（編）『ペ

ルシアと唐』（東西文明の交流２）、東京、平凡社 , pp. 276–335.

山田信夫　1989『北アジア遊牧民族史研究』東京、東京大学出版会。

吉田　豊　2011a「ソグド人とソグドの歴史」、曾布川寛／吉田豊（共編）『ソグド人の美術と言語』京都、臨川書店、pp. 7–78.

吉田　豊　2011b「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, pp. 1–41, incl. 2 pls.

吉田　豊　2017a「中国、トルファンおよびソグディアナのソグド人景教徒 —— 大谷探検隊将来西域文化資料 2497 が提起する問題」、入澤崇／橘堂晃一（編）『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢　仏教・マニ教・景教』（龍谷大学西域研究叢書６）、京都、龍谷大学 , pp. 155–180.

吉田　豊　2017b「トルファンおよび中国江南のマニ教絵画について —— マニの描いた「絵図」を視野に」、宮治昭（編）『アジア仏教美術論集　中央アジアⅠ　ガンダーラ～東西トルキスタン』東京、中央公論美術出版、pp. 551–582.

吉田　豊　2018「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, pp. 155–182.

吉田　豊　2019「カラバルガスン碑文に見える大食とウイグルの関係」『西南アジア研究』89, pp. 34–57.

吉田　豊　2020「ソグド語の密教経典とセミレチエ仏教」"Some Problems Surrounding Sogdian Esoteric Texts and the Buddhism in Semirech'e."『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 193–203.

吉田　豊／古川摂一（編）　2015『中国江南マニ教絵画研究』京都、臨川書店。

ラ＝ヴェシエール、エチエンヌ＝ドゥ；影山悦子（訳）　2019『ソグド商人の歴史』東京、岩波書店。

Atdaev, S.　2016 "The Ceremony of Calling the Rain in Turkmen Traditions." *Studia et Documenta Turcologica* 3/4 (2015-2016), pp. 131–138.

Atwood, Ch. P.　2014 "Historiography and Transformation of Ethnic Identity in the Mongol Empire: the Öng'üt Case." *Asian Ethnicity* 15-4, pp. 514–534.

Barbati, Ch.　2015 "La documentation sogdienne chrétienne et le monastère de Bulayïq." In: P. G. Borbone / P. Marsone (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études Syriaques, 12), Paris: Geuthner, pp. 89–120.

Barthold, W.　1913 "Karluk." In: *The Encyclopaedia of Islām*, vol. I, Leyden / London, pp. 766–767.

Barthold, W.　1968 *Turkestan down to the Mongol Invasion*, Third Edition. London.

Bi, Bo 畢 波 / N. Sims-Williams　2015 "Sogdian Documents from Khotan, II: Letters and Miscellaneous Fragments." *Journal of the American Oriental Society* 135-2 (2014), pp. 261–282, incl. 7 figs.

Biran, M.　2001 "Qarakhanid Studies. A View from the Qara Khitai Edge." *Cahier d'Asie Centrale* 9, pp. 77–89.

Biran, M.　2013 "Unearthing the Liao Dynasty's Relations with the Muslim World: Migrations, Diplomacy, Commerce, and Mutual Perceptions." *Journal of Song-Yuan Studies* 43, pp. 221–251.

Biran, M.　2015 "The Qarakhanids' Eastern Exchange: Preliminary Notes on the Silk Roads in the Eleventh and Twelfth Centuries." In: J. Bemmann / M. Schmauder (eds.), *Complexity of Interaction along the Eurasian Steppe Zone in the First Millennium CE*, (Bonn Contributions to Asian Archaeology, 7), Bonn: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität, pp. 575–595.

Borbone, P. G.　2015 "Les «provinces de l'extérieur» vues par l'Eglise-mère." In: P. G. Borbone / P. Marsone (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études Syriaques, 12), Paris: Geuthner, pp. 121–157.

Chwolson, D.　1890 "Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie." *Mémoires de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Pétersbourg*, VIIe série, tome 37, no. 8, St. Petersburg.

Chwolson, D.　1897 *Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie*, Neue Folge. St. Petersburg.

Clark, L. V.　2017 *Uygur Manichaean Texts. Texts, Translations, Commentary. Vol. III: Ecclesiastical Texts*. (Corpus Fontium Manichaeorum, Series Turcica, III), Turnhout: Brepols.

Clauson, G.　1961 "Ak Beshim ── Suyab." *Journal of the Royal Asiatic Society* 1961, pp. 1–13.

Dankoff, R. / J. Kelly (eds.)　1982-85 *Maḥmūd al-Kāšγarī, Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luγāt at-Turk)*. 3 vols., Cambridge: Harvard University Printing Office.

Dauvillier, J.　1948 "Les provinces chaldéennes "de l'Extérieur" au Moyen Age." In: *Mélanges offerts au R. P. Ferdinand Cavallera*, Toulouse: Institut catholique de Toulouse, pp. 260–316.

Desreumaux, A.　2015 "La collection des pierres tombales syro-orientales du Turkestan conservées à Paris et à Lyon." In: P. G. Borbone / P. Marsone (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études Syriaques, 12), Paris: Geuthner, pp. 237–256.

Dickens, M.　2010 "Patriarch Timothy I and the Metropolitan of the Turks." *Journal of the Royal Asiatic Society* 20-2, pp. 117–139.

Dickens, M.　2015 "Le christianisme syriaque en Asie Centrale." In: P. G. Borbone / P. Marsone (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études Syriaques, 12), Paris: Geuthner, pp. 1–39.

Dickens, M.　2019 "Syriac Christianity in Central Asia." In: D.

King (ed.), T*he Syriac World*, London / New York: Routledge, pp. 583–624.

Dickens, M.　2020 “Tarsā: Persian and Central Asian Christians in Extant Literature.” In: L. Tang / D. W. Winkler (eds.), *Artifact, Text, Context. Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia*. (orientalia-patristica-oecumenica, 17), Wien / Zürich: LIT Verlag, pp. 9–41.

Dodge, B.　1970 T*he Fihrist of al-Nadīm. A Tenth-Century Survey of Muslim Culture*. New York : Columbia University Press.

Dunlop. D. M.　1944 “The Karaits of Eastern Asia.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 11-2, pp. 276–289.

Duturaeva, D.　2016 “Between the Silk and Fur Roads: The Qarakhanid Diplomacy and Trade.” *Orientierungen: Zeitschrift zur Kultur Asiens* 28, pp. 173–212.

Duturaeva, D.　2018 “Qarakhanid Envoys to Song China.” *Journal of Asian History* 52-2, pp. 179–208.

Enoki, Kazuo　榎　一雄　1964 “The Nestorian Christianism in China in Mediaeval Time according to Recent Historical and Archaeological Researches.” In: *Problemi Attuali di Scienza e di Cultura. Atti del Convegno Internazionale sul Tema: L’Oriente Cristiano nella Storia della Civiltà (Roma 31 marzo - 3 aprile 1963)(Firenze 4 aprile 1963)*, Roma: Accademia Nazionale dei Lincei, pp. 45–81, +9 pls. +2 maps.

Frenkel, Y.　2005 “The Turks of the Eurasian Steppes in Medieval Arabic Writing.” In: R. Amitai / M. Biran (eds.), *Mongols, Turks, and Others: Eurasian Nomads and the Sedentary World*, Leiden: Brill, pp. 201–234.

Frye, R. N.　1954 *The History of Bukhara. Translated from a Persian Abridgment of the Arabic Original by Narshakhī*. Cambridge, Massachusetts: The Mediaeval Academy of America.

Golden, P. B.　1990 “The Karakhanids and Early Islam.” In: D. Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge &c.: Cambridge University Press, pp. 343–370.

Golden, P. B.　1992 *An Introduction to the History of the Turkic Peoples. Ethnogenesis and State-Formation in Medieval and Early Modern Eurasia and the Middle East*. (Turcologica, 9), Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Grünwedel, A.　1906 *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903*. München (1905).

Hambis, L.　1953 “Deux noms chrétiens chez les Tatar.” *Journal Asiatique* 1953, pp. 473–475.

Hunter, E. C. D.　1991 “The Conversion of the Kerait to Christianity in A.D. 1007.” *Zentralasiatische Studien* 22 (1989/1991), pp. 142–163.

Hunter, E. C. D.　1992 “Syriac Christianity in Central Asia.” *Zeitschrift für Religions- und Geistesgeschichte* 44-4, pp. 362–368.

Hunter, E. C. D.　1996 “The Church of the East in Central Asia.” *Bulletin of the John Rylands University Library* 78-3, pp. 129–142.

Hunter, E. C. D. / M. Dickens (eds.)　2014 *Syrische Handschriften, Teil 2: Texte der Berliner Turfansammlung (Syriac Texts from the Berlin Turfan Collection)*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Karev, Y.　2015 *Samarqand et le Sughd à l’époque ‘Abbāsside. Histoire politique et sociale*. (Studia Iranica, cahier 55), Paris.

King, A.　2013 “Early Islamic Sources on the Kitan Liao: The Role of Trade.” *Journal of Song-Yuan Studies* 43, pp. 253–271.

Klein, W.　2000 *Das nestorianische Christentum an den Handelswegen durch Kyrgyzstan bis zum 14. Jh*. (Silk Road Studies, 3), Turnhout: Brepols.

Klein, W.　2004 “A Newly Excavated Church of Syriac Christianity along the Silk Road in Kyrghyzstan.” *Journal of Eastern Christian Studies* 56, pp. 25–47.

Klein, W. / Ch. Reck　2004 “Ein Kreuz mit sogdischen Inschrift aus Ak-bešim / Kyrgyzstan.” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 154-1, pp. 147–156.

Le Coq, A. von　1913 *Chotscho. Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der Ersten Königlich Preussischen Expedition nach Turfan in Ost-Turkistan*. Berlin. (Repr.: Graz, 1979.)

Le Coq, A. von　1923 *Die manichäischen Miniaturen. (Die buddhistische Spätantike in Mittelasien, II)*, Berlin. (Repr.: Graz, 1973.)

Livshits, V. A.　2015 *Sogdian Epigraphy of Ctentral Asia and Semirech’e*. (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II: Inscriptions of the Seleucid and Parthian Periods and of Eastern Iran and Central Asia, Vol. III: Sogdian, IV), London: School of Oriental and African Studies.

Lurje, P.　2010 *Personal Names in Sogdian Texts*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Martinez, A. P.　1983 “Gardīzī’s Two Chapters on the Turks.” *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 2 (1982), pp. 109–217, incl. many pls. (pp. 176–217).

Mingana, A.　1925 “The Early Spread of Christianity in Central Asia and the Far East. A New Document.” *Bulletin of the John Rylands Library* 9, pp. 297–371.

Minorsky, V.　1937 *Ḥudūd al-‘Ālam. ‘The Regions of the World.’ A Persian Geography 372 A.H. -- 982 A.D*. With the preface by V. V. Barthold. London. (2nd ed.: London 1970.)

Minorsky, V.　1948 “Tamīm ibn Baḥr’s Journey to the Uyghurs.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 12-2, pp. 275–305.

Moriyasu, Takao　2003 “Four Lectures at the Collège de France in May 2003. History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia.” In: T. Moriyasu

(ed.), *World History Reconsidered through the Silk Road*, Osaka, Osaka University, pp. 23–111, +15 pls. in colour.

Moriyasu, Takao 2004 *Die Geschichte des uigurischen Manichäismus an der Seidenstraße*. Übersetzt von Christian Steineck, (Studies in Oriental Religions, 50), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Moriyasu, Takao 2011 "The Discovery of Manichaean Paintings in Japan and Their Historical Background." In: J. A. van den Berg et al. (eds.), *'In Search of Truth': Augustine, Manichaeism and Other Gnosticism. Studies for Johannes van Oort at Sixty*, (Nag Hammadi and Manichaean Studies, 74), Leiden / Boston: Brill, pp. 339–360.

Moriyasu, Takao 2019 *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road*. (Berliner Turfantexte, 46), Turnhout (Belgium): Brepols.

Moule, A. C. 1930 *Christians in China before the Year 1550*. London: Society for Promoting Christian Knowledge. (Peprint: Taipei 1972.)

Niu, Ruji 牛 汝極 2010 *La croix-lotus. Inscriptions et manuscrits nestoriens en écriture syriaque découverts en Chine (XIII-XIV siècles)*. Shanghai: Shanghai Classics Publishing House.

Paolillo, M. 2013 "White Tatars: The Problem of the Origin of the Öngüt Conversion to Jingjiao and the Uighur Connection." In: Tang Li / D. W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shores. Studies on East Syriac Christianity in China and Central Asia*. (orientalia - patristica - oecumenica, 5), Zürich / Berlin: LIT Verlag, pp. 237–254.

Pelliot, P. 1914 "Chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-Orient." *T'oung Pao* 15, pp. 623–644, +1 pl.

Pelliot, P. 1920 "À propos des Comans." *Journal Asiatique* 1920 avril-juin, pp. 125–185.

Pelliot, P. 1930 "Christianity in Central Asia in the Middle Ages." *Journal of the Royal Central Asian Society* 17, pp. 301–312.

Pelliot, P. / J. Dauvillier 1973 *Recherches sur les chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient*. (Œuvres posthumes de Paul Pelliot), Paris: Imprimerie Nationale.

Pelliot, P. / L. Hambis 1951 *Histoire des campagnes de Gengis khan. Cheng-wou ts'in-tcheng lou*. Leiden: E. J. Brill.

Pritsak, O. 1951 "Von den Karluk zu den Karachaniden." *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 101, pp. 270–300.

Pritsak, O. 1954 "Die Karachaniden." *Der Islam* 31-1, pp. 17–68.

Raschmann, S.-Ch. 2009 "Traces of Christian Communities in the Old Turkish Documents." In: 張定京／阿不都熱西提・亜庫甫（編）『突厥語文学研究 —— 耿世民教授八十華誕紀念文集』北京：中央民族大学出版社 , pp. 408–425, incl. 1 pl.

Ryan, J. D. 1998 "Christian Wives of Mongol Khans: Tartar Queens and Missionary Expectations in Asia." *Journal of the Royal Asiatic Society*, 3rd series, 8-3, pp. 411–421.

Sims-Williams, N. 1990 "Bulayïq." In: *Encyclopaedia Iranica*, vol. IV, fasc. 5, 1989, p. 545.

Sims-Williams, N. 1991 "Christianity, iii. In Central Asia And Chinese Turkestan." In: *Encyclopaedia Iranica*, vol. V, fasc. 5, pp. 530–534.

Sims-Williams, N. 1992 "Sogdian and Turkish Christians in the Turfan and Tun-huang Manuscripts." In: A. Cadonna (ed.), *Turfan and Tun-huang. The Texts. Encounter of Civilizations on the Silk Route*, (Orientalia Venetiana, 4), Firenze: Leo S. Olschki Editore, pp. 43–61.

Sims-Williams, N. 1997 *New Light on Ancient Afghanistan. The Decipherment of Bactrian*. (An Inaugural Lecture Delivered on 1 February 1996), London: School of Oriental and African Studies.

Sims-Williams, N. 2009 "Christian Literature in Middle Iranian Languages." In: R. E. Emmerick / M. Macuch (eds.), *A History of Persian Literature, vol. XVII, The Literature of Pre-islamic Iran*, London / New York: I. B. Tauris, pp. 266–287.

Sims-Williams, N. 2012 *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents* (revised edition). (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II: Inscriptions of the Seleucid and Parthian Periods and of Eastern Iran and Central Asia, Vol. VI: Bactrian), London: The Nour Foundation.

Sims-Williams, N. 2016 *A Dictionary: Christian Sogdian, Syriac and English*. (Beiträge zur Iranistik, 41), Wiesbaden: Reichert Verlag.

Sims-Williams, N. 2020 "The Bactrian Documents as a Historical Source." In: R. E. Payne / Rh. King (eds.), *The Limits of Empire in Ancient Afghanistan. Rule and Resistance in the Hindu Kush, circa 600 BCE–600 CE*, Wiesbaden, pp. 231–244.

Sims-Williams, N. / J. Hamilton 1990 *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang*. (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II: Inscriptions of the Seleucid and Parthian Periods and of Eastern Iran and Central Asia, Vol. III: Sogdian, III), London: School of Oriental and African Studies.

Sims-Williams, N. / J. Hamilton 2015 *Turco-Sogdian Documents from 9th-10th Century Dunhuang*. Tr. by N. Sims-Williams with an Appendix by Wen Xin, (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III) London: School of Orieantal and African Studies.

Siouffi, M. 1881 "Notice sur un patriarche nestorien." *Journal Asiatique*, janvier 1881, pp. 89–96.

Stark, S. 2007 "Mercenaries and City Rulers: Early Turks in Pre-Muslim Mawarannahr." In: L. Popova et al. (eds.), *Social Orders and Social Landscapes: Proceedings of the 2005 University of Chicago Conference on Eurasian Archaeology*, Newcastle, pp. 307–334.

Stein, M. A. 1921 *Serindia. Detailed Report of Explorations*

in Central Asia and Westernmost China. 5 vols., Oxford: Clarendon Press.

Tang, Li　唐　莉　2009 “Turkic Christians in Central Asia and China (5th–14th Centuries).” In: 張定京／阿不都熱西提・亜庫甫（編）『突厥語文学研究 —— 耿世民教授八十華誕紀念文集』北京：中央民族大学出版社 , pp. 435–448.

Tang, Li　唐　莉　2011 *East Syriac Christianity in Mongol-Yuan China*. (Orientalia et Biblica 18), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Tezcan, M.　2020 “On “Nestorian” Christianity among the Hephthalites or the White Huns.” In: L. Tang / D. W. Winkler (eds.), *Artifact, Text, Context. Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia*. (orientalia-patristica-oecumenica, 17), Wien / Zürich: LIT Verlag, pp. 195–212.

Wang, Yuanyuan　王 媛媛　2016 “Priests of Jingjiao in the Xizhou Uighur Kingdom (Five Dynasties – the Early Song Period).” In: L. Tang / D. W. Winkler (eds.), *Winds of Jingjiao. Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia*, (orientalia - patristica - oecumenica, 9), Wien: LIT Verlag, pp. 333–346.

Weiers, W.　1973 “Bemerkungen zu den Nachrichten über die Tsu-pu zur Liao-Zeit (907–1125).” *Zentralasiatische Studien* 7, pp. 545–565.

Zhang, Tieshan　張　鉄 山 / P. Zieme　2011 “A Memorandum about the King of the On Uygur and His Realm.” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 64-2, pp. 129–159, incl. 2 pls.

Zieme, P.　1974 “Zu den nestorianisch-türkischen Turfantexten.” In: G. Hazai / P. Zieme (eds.), *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker. Protokollband der XII. Tagung der PIAC*, Berlin, pp. 661–668, +4 pls.

Zieme, P.　2015a “Notes sur les textes chrétiens en vieux-ouïghour.” In: P. G. Borbone et al. (eds.), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, (Études syriaques, 12), Paris: Geuthner, pp. 185–198.

Zieme, P.　2015b *Altuigurische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*. (Gorgias Eastern Christian Studies, 41), Piscataway: Gorgias Press.